

科学的に問題を解決する楽しさ、学んだことと生活経験がつながる楽しさをあじわえる理科授業実践
～ICT 機器ならではの機能を子どもの学びへ効果的に活用しながら～

郡山市立芳山小学校
教諭 宍戸 智紀

1 理科の授業実践への思い

理科の授業を構想するときに常に大切にしていることがある。課題を解決した後に「なるほど、そういう仕組みだったのか」「あっ！だからこういうふうになるのか」「見た目は違うけど、これとこれと同じはたらきをしていたんだな」などのように、学習したことにより新たな自然事象を見る目が育ったことを実感でき、さらにそれが身近な生活経験と結びつくことで理科を学ぶ有用性を感じることにとつながるように単元を見通していくことである。そこに、GIGA スクール構想で導入された1人1台端末を、どう活用することで子ども同士の学びをつなげていくことができるか試行錯誤している。

2 授業の実際

今回は、3年理科と5年理科の授業実践を紹介する。

3年「物の重さをくらべよう」

□実感的で魅力のある自然事象の提示・学びが続く単元構想

この単元では、物の重さに目を向けて、形を変えたり粉々にしたりしても、物質の質量は変わらないことをつきとめ、物の重さの不思議さについて子どもたちは興味をもち始めた。さらに、教材メーカー製の材質が違う物質を同一体積にしたブロックへ、見た目を同じにするためにアルミホイルで包んだ物を、両手に持って重さの違いを体感したり電子てんびんで量ったりしながら、体積を同じにして比べると物の重さは材質によって違いがあることに気付くことができるようすすめた。また、見た目が似ている「砂糖と塩」でも、体積を同じにしてそのことを確かめていった。

さらに続けて、誰の家にもある身近な「食用油と水」を実験材料として取り上げた。固体だけではなく、発展的に液体への世界へ知識を広げるためでもあった。そして終末のドレッシングの油が分離しているという身近な現象とつなげられたら、理科を学習する有用性もあじわえるのではないかという思いもあった。まず身近な自然現象に改めて目を向けて「どうして？」に火をつけることで心を揺さぶって「水と油の重さを比べたい」に持っていくことにした。

まず、油の入ったビーカーへ着色した水をピペットで滴下する演示を行った。水が粒状になり次々と沈下していく様子を、食い入るように見つめる子どもたち。そこからつぶやきが広がっていった。

- T じゃあ、水を入れてみます。
C 1 これ、分かれるんじゃない？分かれると思う。
C 2 あーっ！つぶつぶ、小さくてかわいい！
C 3 なんかさ、作るお菓子でさ、こういうのあるよね。
C 4 人工イクラみたい。
C 5 つまめそう。
C 6 なんでこうなるの？
T 油と水、どうなった？
C全体 混ざらない。
C全体 分かれて（水が）下に行った。
C 2 水の方が重いんだよ。
T どうしてそう思うの？
C 7 油に水を入れたら、沈んだから。



- C 8 ミカンジュースにも下と上に分かれてるのがあって、重い方が下に沈むのかなあって。
 T みんなの予想は「水の方が重い」なの？「油の方が重い」という人、いる？
 C 7 油の方がドロドロしてるから、重いのは油だと思う。
 C 9 水の方が重いとは思うけど、でも、油と水の量が違うから変わるかもしれない。
 C10 逆にして水に油を入れてみたら……？
 T 重さ比で大切なことって何だっけ？
 C全体 体積を同じにする！
 T 大切なこと、覚えていたね。じゃあ、砂糖と塩の時のように体積を揃えて比べてみよう。

実感的で身近な自然現象に改めて目を向ける中で、子どもたちから思い思いのつぶやきが生まれた。そして「どうして油と水は分かれるのだろうか？」、さらにC 9の「水の方が重いのではないか」という発言で、本時の課題が焦点化され、実験の見通しをもって動き出した。

班ごとに、油の水の体積を等しくしてそれぞれ電子てんびんで重さを測定していったが、基本の操作は前時に行った砂糖と塩を同体積にして重さを比べる方法と同じだったので、意欲的にそして手際よく動き出していた。ただ、ある班はカップの線に合わせて体積を等しくする操作がうまく出来なかったため、他の班の結果との違いから実験方法の間違いに気づき出した。

- C11 線が凸凹だったせいかも。
 C12 もうちょっとちゃんと（線に）合わせなきゃな。
 C13 は、他の班へ手順を確認に行った。

自分たちの実験の手順をつぶさにふり返って確認することを学ぶ姿も見られた。

□生活の中にある身近な事象と結び付けて考える

液体でも重さの違いがあることを突きとめた後に、終盤ではドレッシングの瓶を提示した。

- T ドレッシングを使う前って何をする？
 C14 振る！おいしいところが下に溜まってるから。
 T そうだよなあ。ラベルを剥がしてみるよ。
 〈ラベルを剥がすとドレッシングが上下に分離していることに目が行く子どもたち〉
 C 6 うわあ、そんなふうになってたんだ！
 C 7 下が水で、上が油？
 C 9 ドレッシングは油を使っているから、こんなふうに分かれているんだね。



ドレッシングのように普段からなじみのあるものにも、重さの違いによって水と油が分離するという現象があることを捉えることができた。

その後、「逆に、水へ油を入れたらどうなるんだろう」という新たに出てきた課題を試行してみた。

- 既習である水は油より重かったことを押さえて、水が入ったビーカーへ油を一滴ずつ入れていった。油滴はポタンと落ちて水面下に沈むが、すぐさま方向を変えて水より上へ浮いて円形の模様をつくった。油滴を入れれば入れるほどその円の数は増え、やがて隣同士が合わさって大きな円もできてきた。そんな様子を見て、
 C15 ああ、やっぱり上になった！
 C14 これ、ラーメン食べた時に見たことある！

C 8 浮いてる油を箸で繋げて大きな丸を作ったことあるよ
と、子どもたちは生活経験と結び付けて語った。

これからもそんな理科の学びをつくりたいと思う。

5年「電流がうみ出す力」

電磁石に使われるコイルの巻き数と電流の強さの条件を変えたことによる、磁力の違いについて実験した場面である。

口仲間同士をつなぐ学びに1人1台端末を効果的に生かす（Google スプレッドシートの共有利用）

この単元では、子どもたち一人一人が自らの道具を用いて学習していたので、電磁石の条件を変えながらぶら下がる釘の数を確認していくこの場面においても、課題を解決するために一人一人が個別に取り組むこととした。そして、結果を共有するためにGoogleのスプレッドシートを活用した。

スプレッドシートにはあらかじめ児童全員の名前の行と、子どもたちが計画した電磁石と電池の条件4つを列に記しておき（右図、4色の列）、最下部にはそれぞれの条件毎に全員の結果の平均を算出する関数を設定しておいた（右図、黄色のセル）。このスプレッドシートを、この学級の児童が所属しているGoogleのクラスルームへと共有し、FCSアカウントでログインすることによりスプレッドシートへ児童がアクセス出来るようにした。

	条件1つ	条件2つ直列	条件3つ直列	条件4つ直列
児童A	5	6	10	16
児童B	4	5	9	15
児童C	6	7	11	17
児童D	3	4	8	14
児童E	5	6	10	16
児童F	4	5	9	15
児童G	6	7	11	17
児童H	3	4	8	14
児童I	5	6	10	16
児童J	4	5	9	15
児童K	6	7	11	17
児童L	3	4	8	14
児童M	5	6	10	16
児童N	4	5	9	15
児童O	6	7	11	17
児童P	3	4	8	14
児童Q	5	6	10	16
児童R	4	5	9	15
児童S	6	7	11	17
児童T	3	4	8	14
児童U	5	6	10	16
児童V	4	5	9	15
児童W	6	7	11	17
児童X	3	4	8	14
児童Y	5	6	10	16
児童Z	4	5	9	15
児童AA	6	7	11	17
児童AB	3	4	8	14
児童AC	5	6	10	16
児童AD	4	5	9	15
児童AE	6	7	11	17
児童AF	3	4	8	14
児童AG	5	6	10	16
児童AH	4	5	9	15
児童AI	6	7	11	17
児童AJ	3	4	8	14
児童AK	5	6	10	16
児童AL	4	5	9	15
児童AM	6	7	11	17
児童AN	3	4	8	14
児童AO	5	6	10	16
児童AP	4	5	9	15
児童AQ	6	7	11	17
児童AR	3	4	8	14
児童AS	5	6	10	16
児童AT	4	5	9	15
児童AU	6	7	11	17
児童AV	3	4	8	14
児童AW	5	6	10	16
児童AX	4	5	9	15
児童AY	6	7	11	17
児童AZ	3	4	8	14
児童BA	5	6	10	16
児童BB	4	5	9	15
児童BC	6	7	11	17
児童BD	3	4	8	14
児童BE	5	6	10	16
児童BF	4	5	9	15
児童BG	6	7	11	17
児童BH	3	4	8	14
児童BI	5	6	10	16
児童BJ	4	5	9	15
児童BK	6	7	11	17
児童BL	3	4	8	14
児童BM	5	6	10	16
児童BN	4	5	9	15
児童BO	6	7	11	17
児童BP	3	4	8	14
児童BQ	5	6	10	16
児童BR	4	5	9	15
児童BS	6	7	11	17
児童BT	3	4	8	14
児童BU	5	6	10	16
児童BV	4	5	9	15
児童BW	6	7	11	17
児童BX	3	4	8	14
児童BY	5	6	10	16
児童BZ	4	5	9	15
児童CA	6	7	11	17
児童CB	3	4	8	14
児童CC	5	6	10	16
児童CD	4	5	9	15
児童CE	6	7	11	17
児童CF	3	4	8	14
児童CG	5	6	10	16
児童CH	4	5	9	15
児童CI	6	7	11	17
児童CJ	3	4	8	14
児童CK	5	6	10	16
児童CL	4	5	9	15
児童CM	6	7	11	17
児童CN	3	4	8	14
児童CO	5	6	10	16
児童CP	4	5	9	15
児童CQ	6	7	11	17
児童CR	3	4	8	14
児童CS	5	6	10	16
児童CT	4	5	9	15
児童CU	6	7	11	17
児童CV	3	4	8	14
児童CW	5	6	10	16
児童CX	4	5	9	15
児童CY	6	7	11	17
児童CZ	3	4	8	14
児童DA	5	6	10	16
児童DB	4	5	9	15
児童DC	6	7	11	17
児童DD	3	4	8	14
児童DE	5	6	10	16
児童DF	4	5	9	15
児童DG	6	7	11	17
児童DH	3	4	8	14
児童DI	5	6	10	16
児童DJ	4	5	9	15
児童DK	6	7	11	17
児童DL	3	4	8	14
児童DM	5	6	10	16
児童DN	4	5	9	15
児童DO	6	7	11	17
児童DP	3	4	8	14
児童DQ	5	6	10	16
児童DR	4	5	9	15
児童DS	6	7	11	17
児童DT	3	4	8	14
児童DU	5	6	10	16
児童DV	4	5	9	15
児童DW	6	7	11	17
児童DX	3	4	8	14
児童DY	5	6	10	16
児童DZ	4	5	9	15
児童EA	6	7	11	17
児童EB	3	4	8	14
児童EC	5	6	10	16
児童ED	4	5	9	15
児童EE	6	7	11	17
児童EF	3	4	8	14
児童EG	5	6	10	16
児童EH	4	5	9	15
児童EI	6	7	11	17
児童EJ	3	4	8	14
児童EK	5	6	10	16
児童EL	4	5	9	15
児童EM	6	7	11	17
児童EN	3	4	8	14
児童EO	5	6	10	16
児童EP	4	5	9	15
児童EQ	6	7	11	17
児童ER	3	4	8	14
児童ES	5	6	10	16
児童ET	4	5	9	15
児童EU	6	7	11	17
児童EV	3	4	8	14
児童EW	5	6	10	16
児童EX	4	5	9	15
児童EY	6	7	11	17
児童EZ	3	4	8	14
児童FA	5	6	10	16
児童FB	4	5	9	15
児童FC	6	7	11	17
児童FD	3	4	8	14
児童FE	5	6	10	16
児童FF	4	5	9	15
児童FG	6	7	11	17
児童FH	3	4	8	14
児童FI	5	6	10	16
児童FJ	4	5	9	15
児童FK	6	7	11	17
児童FL	3	4	8	14
児童FM	5	6	10	16
児童FN	4	5	9	15
児童FO	6	7	11	17
児童FP	3	4	8	14
児童FQ	5	6	10	16
児童FR	4	5	9	15
児童FS	6	7	11	17
児童FT	3	4	8	14
児童FU	5	6	10	16
児童FV	4	5	9	15
児童FW	6	7	11	17
児童FX	3	4	8	14
児童FY	5	6	10	16
児童FZ	4	5	9	15
児童GA	6	7	11	17
児童GB	3	4	8	14
児童GC	5	6	10	16
児童GD	4	5	9	15
児童GE	6	7	11	17
児童GF	3	4	8	14
児童GG	5	6	10	16
児童GH	4	5	9	15
児童GI	6	7	11	17
児童GJ	3	4	8	14
児童GK	5	6	10	16
児童GL	4	5	9	15
児童GM	6	7	11	17
児童GN	3	4	8	14
児童GO	5	6	10	16
児童GP	4	5	9	15
児童GQ	6	7	11	17
児童GR	3	4	8	14
児童GS	5	6	10	16
児童GT	4	5	9	15
児童GU	6	7	11	17
児童GV	3	4	8	14
児童GW	5	6	10	16
児童GX	4	5	9	15
児童GY	6	7	11	17
児童GZ	3	4	8	14
児童HA	5	6	10	16
児童HB	4	5	9	15
児童HC	6	7	11	17
児童HD	3	4	8	14
児童HE	5	6	10	16
児童HF	4	5	9	15
児童HG	6	7	11	17
児童HH	3	4	8	14
児童HI	5	6	10	16
児童HJ	4	5	9	15
児童HK	6	7	11	17
児童HL	3	4	8	14
児童HM	5	6	10	16
児童HN	4	5	9	15
児童HO	6	7	11	17
児童HP	3	4	8	14
児童HQ	5	6	10	16
児童HR	4	5	9	15
児童HS	6	7	11	17
児童HT	3	4	8	14
児童HU	5	6	10	16
児童HV	4	5	9	15
児童HW	6	7	11	17
児童HX	3	4	8	14
児童HY	5	6	10	16
児童HZ	4	5	9	15
児童IA	6	7	11	17
児童IB	3	4	8	14
児童IC	5	6	10	16
児童ID	4	5	9	15
児童IE	6	7	11	17
児童IF	3	4	8	14
児童IG	5	6	10	16
児童IH	4	5	9	15
児童II	6	7	11	17
児童IJ	3	4	8	14
児童IK	5	6	10	16
児童IL	4	5	9	15
児童IM	6	7	11	17
児童IN	3	4	8	14
児童IO	5	6	10	16
児童IP	4	5	9	15
児童IQ	6	7	11	17
児童IR	3	4	8	14
児童IS	5	6	10	16
児童IT	4	5	9	15
児童IU	6	7	11	17
児童IV	3	4	8	14
児童IW	5	6	10	16
児童IX	4	5	9	15
児童IY	6	7	11	17
児童IZ	3	4	8	14
児童JA	5	6	10	16
児童JB	4	5	9	15
児童JC	6	7	11	17
児童JD	3	4	8	14
児童JE	5	6	10	16
児童JF	4	5	9	15
児童JG	6	7	11	17
児童JH	3	4	8	14
児童JI	5	6	10	16
児童JJ	4	5	9	15
児童JK	6	7	11	17
児童JL	3	4	8	14
児童JM	5	6	10	16
児童JN	4	5	9	15
児童JO	6	7	11	17
児童JP	3	4	8	14
児童JQ	5	6	10	16
児童JR	4	5	9	15
児童JS	6	7	11	17
児童JT	3	4	8	14
児童JU	5	6	10	16
児童JV	4	5	9	15
児童JW	6	7	11	17
児童JX	3	4	8	14
児童JY	5	6	10	16
児童JZ	4	5	9	15
児童KA	6	7	11	17
児童KB	3	4	8	14
児童KC	5	6	10	16
児童KD	4	5	9	15
児童KE	6	7	11	17
児童KF	3	4	8	14
児童KG	5	6	10	16
児童KH	4	5	9	15
児童KI	6	7	11	17
児童KJ	3	4	8	14
児童KK	5	6	10	16
児童KL	4	5	9	15
児童KM	6	7	11	17
児童KN	3	4	8	14
児童KO	5	6	10	16
児童KP	4	5	9	15
児童KQ	6	7	11	17
児童KR	3	4	8	14
児童KS	5	6	10	16
児童KT	4	5	9	15
児童KU	6	7	11	17
児童KV	3	4	8	14
児童KW	5	6	10	16
児童KX	4	5	9	15
児童KY	6	7	11	17
児童KZ	3	4	8	14
児童LA	5	6	10	16
児童LB	4	5	9	15
児童LC	6	7	11	17
児童LD	3	4	8	14
児童LE	5	6	10	16
児童LF	4	5	9	15
児童LG	6	7	11	17
児童LH	3	4	8	14

□プログラムで計算表示された学級平均値の利用

【実験結果を考察していく場面】

- C17 100回巻きの「電池1つ」と「電池2つ並列」では、電池2つのほうが（自分が実験した釘の数が）2本多かったから、ちょっと強いのかも。
- C18 でもさあ、平均を見るとさ「100回巻きで電池1つ」と「100回巻きで電池2つ並列」では、並列のほうがちょっと多いけど、同じ100回巻きで「電池2つ直列」と比べると平均は全然小さいから、（電池1つと電池2つ並列では）ほとんど変わらなそうだよ。
- C17 そうか、同じ数だった人もけっこういるもんね。誤差といえるかもね。
- C19 「100回巻きで電池2つ直列」は（電池1つでぶら下がった数の）だいたい2倍だし、「200回巻きで電池2つ直列」は3倍にもなってるよね。
- C18 コイルの巻いた数と直列にした電池の数が、強さに関係するんだね。
- C15 電池3個直列だったらもっと強くなりそう。

4つの平均を相互に比較したC18の見方が受け容れられ、C19やC15のように思考がまとまりつなげていった。

この実験は、導線を自分で巻いたコイルを用いるので電磁石の磁力に個体差が生じやすい。さらに釘をぶら下げる器用さにも個人差があることから、同一条件でも結果に数本の誤差は出やすい実験となる。この単元を指導するに当たってスプレッドシートを利用する以前は、学級全体で結果を共有するために、模造紙に大きく描いたグラフ軸へ各々の児童がシールを貼る形をとっていたこともあった。この方法だと、結果のおおまかな分布を視覚的に見やすい利点はあるのだが、数値で捉えることは難しかった。今回取り組んでみたスプレッドシートでは、数値で考察していくことが可能となり、学級全員の平均値を知る際にも一人一人が実験結果をセルへ入力するだけで、人が計算をすることなく正しく表示できたので、計算ミスの可能性と手計算時間が全くなかった。

3 課題と今後の取り組み

理科に限ったことではないが、課題をこなす時間に個人差が出るのは当たり前であり、3年の実践では結果を出すまでの時間が班ごとに異なった。はじめに結果を出した班は手順や協力的体制など効率よく実験を進めて、技能面の力を付けているとみることもできる。そんな班へは、再試行を勧めていることが多いが、別にオプションの実験機会を与えるという視点を持ち、その準備や声かけも心がけていきたい。今回であれば、はじめの演示中につぶやきがあった「逆に、水へ油を入れたらどうなるんだろう」をさせてみてはというものだ。実際には後になって一斉に全員で試したのだが、技能が高まっていたこの子どもたちなら、道具と材料を与えるだけで実験方法は考えて試していたことだろう。そのオプションの実験結果は、共通の実験結果をまとめ終わってから紹介することで仲間へ広められたであろう。さらにそれを聞いた他の班の子どもたちは、次は自分たちもオプションの実験をやってみたいという意欲を高めたり、そうなるために実験を効率よく進める技とは何かという部分に目が当たったりすることだろう。「逆に、水へ油を入れたらどうなるんだろう」と子どもがつぶやいた時、これを活かすそんな心の余裕を持って授業をしたいと思う。また5年生の実践では1人1台の端末がなければ無かったであろう実験時間の短縮と仲間とのつながりもうまれた。DXは日々進化していて新しい技術による新たな活用が可能となることは途切れることがないだろう。どんな場面でどう使うかを探求する姿勢を常に持ち、日々自分自身もアップデートし続けていきたい。今後もICT機器を有効に活用しながら、身近な自然の事物・現象の中から見いだした課題と向き合い、科学的に問題を解決する楽しさ、学んだことと生活経験がつながる楽しさをあじわえる授業を目指していきたい。

「一人残らず45分間学び続ける授業」の日常化をめざして

三春町立三春小学校
教諭 原田 由香里

1 実践の内容及び方法等

本校は、学校教育目標を『強く』『正しく』『美しく』～『明德の精神』（くもりのない立派な徳性）を基調とした、未来に生きる人間性豊かな子どもの育成～」と掲げ、目指す児童像を「明るく元気な子ども（強く）」「学び続ける子ども（正しく）」「心をみがく子ども（美しく）」として、教育課程全体を通して取り組んでいる。

「学び続ける子ども（正しく）」では、「主体的に取り組む課題を解決しようとする子ども」「協働的に学習に取り組む子ども」の育成に重点に置き、日々の授業改善を図っている。麻布教育研究所の永島孝嗣先生を学校教育アドバイザーとして招聘し、ご指導をいただきながら「一人残らず45分間学び続ける授業の日常化」をめざし、校内研究を進めて4年目となった。また、「三春小スタンダード」として、ユニバーサルデザインの考えによる学習の基盤づくりも長年継続して取り組んでいる。

(1) 日常の授業の質的改善を図る授業研究会

本校では、授業研究会を従来の「教師の指導方法」を協議する授業研究ではなく、「子どもの学ぶ姿から学ぶ」授業研究として位置付けている。授業の中で一人一人がどのように学んでいるか、全員の学びはどうかを捉えることができるようにするための授業研究とし、自らの「子どもの学びを見る目」を鍛えるトレーニングとして臨んでいる。学級の子ども全員に対し「〇分付近、何人学んでいて、何人学べていない」という、従来より、より正確で精密な判断が日々の授業準備を支えるとともに、授業中その場で必要なことを見極め、適切に支援することができるようになる、という考え方による。

① 授業研究会の方法

- ・全職員が参観することを基本とする。全職員で一つの授業を見て協働的に「子どもから学ぶ」授業研究とする。
- ・授業研究の日常化を目指し、月1回以上の授業研究会を計画。4月・9月・1月の学校教育アドバイザー訪問による授業研究会も含め、年15回実施。子どもから学び続けることで子どもの学びを促進する。
- ・事前研究会は実施しない。指導案の作成も行わない。授業提供者の準備物は参観者に配付する座席表、本時の授業内容（1文程度）のみ。特別な準備を行った授業ではなく、日常の授業で授業研究を行う。また、授業を変えるチャレンジは、研究授業の日ではなく、普段の授業で行う。
- ・参観者は、子どもたちの学びを邪魔しない。話しかけたりせず、観察に徹する。
- ・子ども全員（一人一人、固有名詞で）が45分間「学んでいるか、学んでいないか」を見る自らの判断のトレーニングとして臨むようにする。

② 研究協議（事後研究会）の視点・方法

- ・授業の進め方、発問の仕方など、教師の視点ではなく、そのときの子どもから何を学んだのかを、参観者一人一人が語る。子どもの表情や言動に着目し、子どもの学ぶ姿から、その授業でその子にとってどのような学びが成立していたかを協議する。

- ・グループ協議（15分）では、今日の子どもの学ぶ姿から教師自身が学んだことや、解釈できなかった子どもの事実についても共有する。
- ・全体協議では全員が発言する（一人30秒）。子どもの名前を必ず出して、その子から学んだこと、授業を見る前には知らなかった事実を語る。自分が見た事実を語り、全体で共有することで、その授業の全貌が見えてくる。
- ・自評は行わない。全体協議後、授業者は協議の中で出た子どもの事実の中で、自分が気付いていなかった事実を絞って語る。

【研究協議の視点～児童の学びの事実から～】

- ・何もしていない時間、待っている時間が長い子は誰か。最大で何人いたか。その時刻は、何分付近か。
- ・仲間が大切だと感じていた子は誰か。何人か。
- ・取り組むプロセスの中で、〇〇さんに、先生のねらい以外の学びは何が生まれていたか。
- ・先生が個別支援をしているとき、その子以外で学んでいない子は何人だったか。
- ・授業後も学び続けようとしていたのは、誰か。それはなぜか。 など

(2) 質の高い課題への取り組み

① 「ジャンプの課題」の設定

三春町では東京大学名誉教授の佐藤学先生をお招きし「三春町教育講演会」を開催、協同学習の授業では「共有の学び」（教科書レベル）と「ジャンプの学び」（教科書以上のレベル）の2つの課題で協同的学びを組織することをご指導いただいた。本校でも日々の授業において、どのような課題ならば子どもたちに学びが生まれるのかを意識して「ジャンプの課題」の設定を取り入れている。

【ジャンプの課題とは】

- ・より高いレベルの問題に出合うことで、多様な考え方に出会い、友達と助け合ったり、協同の学びの良さを味わったりすることができるような課題。
- ・その課題の解決が見られなくても、それを考えることによって基礎的概念を習得し、ねらいに到達していくもの。

ジャンプの課題は、今までの「基礎から発展へ」学習する展開ではなく、「発展から基礎へ」という概念で子どもたちに学力をつけさせるものである。できる子にとって有意義であるだけでなく、できない子にとっても、「みんなも解けない」「能力差は少ない」と思わせ、子どもたちを「対等」にし、学ぶ意欲をかきたてるものである。教科書問題をアレンジしたり、1学年上の教科書や中学校入試問題などから、レベルの高い問題を探したりし、クラスの実態に合わせて取り組みを進めている。

【実践例①】 5年算数「割合」

〈教科書（東京書籍）問題〉

「筆箱の仕入れの値段は600円です。利益を30%加えて売ります。売る値段はいくらですか。」

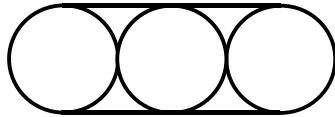
⇒ 〈アレンジしたジャンプの課題〉

「仕入れの値段が600円の筆箱に、30%の利益を加えて売ったところ、利益の合計が900円になりました。この筆箱は何個売れましたか。」

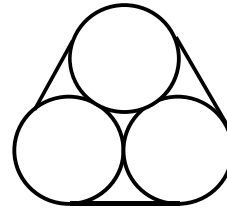
【実践例②】5年算数「円周の長さ」

「半径3 cmの空き缶3つをテープでまともめます。図ア、図イのようにまどめる時、必要なテープの長さはどちらが何cm長いですか。」

図ア



図イ



② 教師の役割

「ジャンプの課題」を設定し、一人一人が学び続けるために、教師の関わり方について意識を変えるように学校全体で取り組んできた。

- ・一人では解けないものを「仲間」や「教材」とつなげる。
- ・「個別支援」ではなく、「仲間とつなぐ」支援をする。教師が入ることで、ペアやグループのつながりを切らないようにする。
- ・子ども一人一人が自分のペースで学び続けられるように、教師が手出し・口出しするのではなく、「モノ」（教材・資料・課題など）による支援に徹する。
- ・45分授業の1割～1割5分（7分程度）は教師が教える時間。残りの時間は子どもたちが自分のペースで学ぶ時間とする。その教える時間は、最初でも最後でもなく、子どもたちの様子を見ながら、即興的に、内容を含め判断する。

(3) 安心して学び合える学級環境づくり

① 学習形態の工夫

本校では昨年度より全学級で学習形態を変え、学び合える環境づくりに取り組んできた。

- ・低学年…コの字型またはペアにして、対話による学び（ペア学習）をたくさん経験させる。
- ・中学年以上…3～4人グループの机配置。3年生の始めは、実態に応じてペアを取り入れてもよいこととする。

テストの時以外は常にペア・グループの学習形態にすることにより、子どもたちを一人にしない学びを意識している。分からないときは隣の友達のことを見たり、「分からないから教えて」と言ったりしやすくなり、友達と関わり合いがもてるようにすることで、学びが深まると考える。

② 安心して関わり合える学級づくり

ペア・グループの学習形態にしても、「分からない」と素直に言える学級、一緒に考えられる関係づくりができていなければ、学び合いは成立しない。日頃から互いに話を聴き合い、認め合える学級づくりを意識して取り組んでいる。話の聴き方など授業中の学び方のルール（「友達が話につまったら、一緒に考えたり、続きを想像したりしよう」など）を提示したり、互いの良さを伝え合う場面を多く設けたりし、友達と安心して関わり合えるよう支援している。

(4) 三春小スタンダード

ユニバーサルデザインの考え方にに基づき、どの子にとっても学びやすい環境を整えられるよう、共通して取り組んでいる。

【三春小スタンダード（一部抜粋）】

(1) 教室環境整備

- ・教室前面の掲示は極力シンプルにする。
→「学級のめあて」は教室後方上、「既習事項」「係活動」等は教室側面に
- ・「声のものさし」「気持ちの温度計」「あったかことば・ちくちくことば」の掲示
- ・「学習の流れ」「一日の時間割」をホワイトボードで示す。
- ・板書の仕方の共通理解

(2) 学習ルールの設定

- ・学用品のルール、机上の整え方
- ・発達段階に応じた話し合いの仕方の例示

2 実践の成果

「子どもの学ぶ姿から学ぶ」授業研究会の実践を通し、教師側の意識の変化とともに、子どもたちの学びに向かう姿に変化が見られるようになった。昨年度の児童アンケートからは、「友達と話し合ったり、助け合ったりしながら勉強している。」「自分のめあてや課題意識をもって、学習に取り組んでいる」という項目で肯定的回答が増えており、他者と関わり合う学びの中、自分なりの課題を明確にしながら、解決まで粘り強く取り組むことができる児童が増えたと考えられる。

【今年度の成果～先生方のアンケートから抜粋～】

- ・学んでいるか、学んでいないか、という視点で研究授業に参加したため、自分の学級で子どもを見る時の視点が変わってきた。いろいろな子を見よう、細かいところまで見ようとするようになった。
- ・自分の授業において一人で全員を見るのには限界があるが、授業研究会の参加を通し、意識して見ようとするようになった。
- ・子どもたちのグループでの関わりが活発になってきた。
- ・ジャンプ問題の必然性を感じ、自分でも取り組んでみようという意欲が高まった。
- ・今までよりも難易度の高い課題を提示すると、子どもたちはやる気が高まり、しっかりと解決できることが分かった。

3 課題及び今後の取り組みの方向性

学校教育アドバイザーの永島先生から「1日1授業は挑戦を。挑戦の頻度を上げ、今までのプラス10分でできる挑戦を何回も行い、その失敗を毎日同僚と分かち合うように。」とご指導を受けている。「ジャンプの課題」についても、難易度の設定が難しく、全員が夢中になって学び続ける課題作り、また、課題解決に向けた資料の内容の充実や精選を図ることが課題である。「子どもを見る目」を鍛えることも、一人ではできず、授業研究会を通して様々な見方を学んでいく。互いの授業を気楽に日常的に5分程度でも見合えることを取り入れたり、授業や学級づくりでうまくいったこと、いかなかったことをもっと職員間で共有したりし、協同的に研究を進めていく必要がある。今後も「一人残らず45分間学び続ける授業」の実践のため研鑽を重ね、子どもも、教師もともに学び合いながら成長できる学校を目指し、研修主任として学校全体で取り組みを進めていきたい。

肯定的・対話的な関わりを大切にした教育活動の展開
～キャリア教育の視点を生かした学級経営と学年経営～

棚倉町立棚倉小学校
教諭 藤田 由紀

1 はじめに

本校では、「なりたい自分になるために学び続ける児童の育成 ～肯定的・対話的な関わりによる教育課程の実践を通して～」を研究テーマとして、キャリア教育の視点を生かした授業づくり、学級づくりに取り組んでいる。5学年経営においても、子どもたちが、「今、学んでいることは、自分にとって必要な学びだ。自分の将来に役立つ大事な学びだ。」と実感し、なりたい自分に近づくために学び続けることができるようにしていきたいという思いで実践を積み重ねてきた。その際、子どもたちが学びをつなぎ、前向きに学び続けるために、肯定的・対話的な関わりを大切にしながら教育活動に取り組んだ。

2 実践の内容・方法

(1) 四半期制による資質・能力の育成

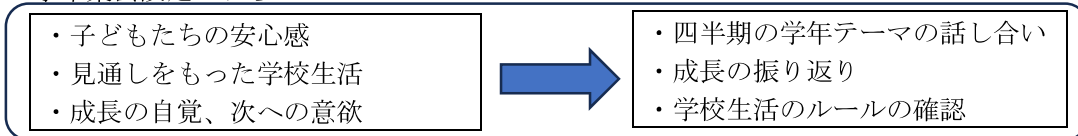
本校では、一年間を4つに分けた四半期制で教育活動を行っており、各学年が四半期という3か月スパンで、子どもたちに育てたい資質・能力を焦点化し、目指す姿や学年テーマを設定している。それらをもとに、子どもたち一人一人がなりたい自分につながる目標を意思決定している。そのため、学年テーマは、子どもたちの考えや思いを大切に設定している。第5学年では、「All in 1」をベースとして、以下のように設定し、年間を通して子どもたちの資質・能力を育成した。

四半期	育てたい資質・能力	目指す姿	学年テーマ
第1 四半期	人間関係形成・ 社会形成能力	一人一人のよさを認め合い、他者と折り合いをつけながら協力・協働することができる	学びをつなげ All in 1
第2 四半期	課題対応能力	失敗してもめげずに、何度でも意欲をもって取り組み、最後までやり遂げることができる	学びを生かせ All in 1
第3 四半期	自己理解・ 自己管理能力	よりよい自分になるために主体的に考え実行することができる	学びを深めろ All in 1
第4 四半期	キャリア プランニング能力	最高学年に向けて、自分の役割を、責任をもって果たすことができる	最高学年へ学びをつなげ All in 1

(2) 資質・能力を意図的・計画的に育むための学年経営

焦点化した資質・能力を意図的・計画的に育成するために、学年担任団による打合せや5学年全児童との学年集会を定期的に設定し、共通理解、共通実践を目指した。また、教育活動の見通しと振り返りを重視した学級経営と学年経営を心がけた。加えて、計画以外にも必要に応じて、タイミングを逃さずに打合せや学年集会を行った。

<学年集会設定のねらい>



実行 実現

- 学年の担任と子どもたちの信頼関係構築
- 学年全体の関わりが増え、人間関係が広がる
- 学年全体で共通理解、指導の徹底
- 学年全体に「肯定的・対話的な関わり」が広がる
- 学年全体で「つながる学び」の意識化



子どもたちも担任たちも「All in 1」を目指す姿に！ 学年団としての高まり

<学年集会における四半期学年テーマ設定の話合い>

学年集会において、四半期ごとに子どもたちと学年テーマを話し合ってきた。以下は、第1四半期の学年テーマの話合いの一部である。第1四半期は、「高学年の仲間入り」「クラス替え」等、子どもたちが気持ちを新たにスタートできる大事な四半期であるため、学年テーマを設定する意義等についても丁寧に話し合った。

年間を通して、子どもたちと「覚え、意識し、行動できる」シンプルで明確な言葉を考え、学年テーマを設定した。

T :	今日の学年集会は、第1四半期の学年テーマについて話し合います。第1四半期は、「一人一人のよさを認め合い、他者と折り合いをつけながら協力・協働できる姿」を目指していますね。この姿をいつも意識して生活できるようにするために、どんな学年テーマにしたらよいでしょうか。
C 1 :	今まで学んだことを生かす。
C 2 :	ワンチームになって、みんなで伸びるはどうか。
C 3 :	ステップアップもいいと思う。今までよりも上を目指した方がいいから。
C 4 :	教育目標に「つなげ学びを」があるから、学びをつなげるがいい。・・・

(3) 教育活動全体を通して資質・能力を育む

学年で設定した資質・能力を育むために、四半期ごとに教科等横断的な視点で単元や領域等を位置付けた。それをキャリア教育関連表(図1)として作成し、教育活動全体を通して資質・能力を育むことに取り組んだ。子どもたち一人一人に資質・能力が身に付くよう、なりたい自分に近づけるよう肯定的・対話的に関わりながら、成長を促した。さらに、四半期の終わりには、学級活動(3)において、なりたい自分の振り返りと次の四半期の目標設定を行った。

第5学年 第4四半期	
キャリアプランニング能力	
高学年に向けて 自分の役割を責任をもって果たす	
高学年へ学びをつなげ All in 1	
目標設定 高学年への学びをつなげ All in 1	目標設定 高学年への学びをつなげ All in 1
学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」	学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」
学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」	学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」
学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」	学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」
学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」	学習活動 「高学年への学びをつなげ All in 1」

図1 第4四半期キャリア教育関連表

(4) 学級活動(3)「第○四半期の振り返りと目標設定」の授業の工夫

子どもたちの成長やがんばりを四半期末に振り返り、次の四半期への意欲をもつことができるよう、学級活動(3)の授業を学年で共通実践してきた。以下は、授業の際に、大事にしている視点である。

① 個と集団へのアプローチ

振り返りにおいて、子どもたちの資質・能力を育成するために、個々の学びの姿を価値付けて、それをつなぎ合わせ、資質・能力が身に付いた姿として実感させ、それを自分の言葉として表現できるように心がけた。みんなで一つの目標に向かって、一人一人が主役、誰一人取り残さない」という思いを大事にした。

T :	第1四半期のめあては何でしたか。
C :	学びをつなげ、オールインワンです。
T :	第2四半期のめあては何でしたか。
C :	学びを生かせ、オールインワンです。
	～子どもたちが資質・能力を発揮している姿を、ICTを活用して振り返る～
T :	<u>こんなに力がつけられたということは、できる人だけ活躍したのではなく・・・</u>
C :	<u>オールインワン！</u>
T :	<u>そうです。オールインワンの気持ちで、みんながやってきたことだね。</u>

② 目標を達成できた根拠の追究

振り返りにおいて、「誰が何を身に付けたか」ではなく、「みんなが身に付けた力は何か」という話し合いをした。子どもたちは、行事を通して「責任感」「協力」「努力」「練習の力」「あきらめない」「集中力」「周りを見る」「仲よく」「楽しく」「人間関係」「体力」「助け合い」「行動力」等を挙げた。10名への意図的指名を通して、「なりたい自分になれた」のは、「どうしてか」を個人に語らせた。子どもたちは「目標に向かって全員で」「一日一日目標を意識して」「普段の生活を大切に」「目標達成を心がける」等を挙げた。身に付けた力の内容よりも、どうやって身に付けたかを重視している。

T :	60人中59人がなりたい自分になれた理由として、 <u>どうやってなれたと思いますか？</u>
-----	---

③ 肯定的・対話的な関わりを大切にした目標設定

目標設定において、子どもたち一人一人が次の成長に向けて、前向きに目標を設定できるよう肯定的・対話的に関わることを心がけている。そのため、事前に、全ての子どもたちのキャリア・パスポートに目を通して、その子が、どんな目標を立て、どのように実践し、成長してきたかを把握し、児童理解を深めた上で、目標設定を促している。

T :	Cさんは、自学さ、すごくがんばってるね。常に、目標をもってるじゃないですか。テストになったときに、「がんばろう」とか「何点取りたいんだ」とか、内容も「こうしたいんだな」って伝わります。
T :	Kさんは最近、忘れ物がなくなってきたよね。先を考えて行動することを意識しているよね。そのことは、第2四半期までの学びなんだけど、それを意識し続けるなら同じ目標でもいいです。

④ 全員参加の目標宣言

意思決定した目標を記述したキャリア・パスポートをもとに、全員に目標を発表させている。子どもたち一人一人を認めたいという思いで、子どもが発表した目標を復唱するようにしている。今後、復唱には、「あなたらしいね。」「さらによいところを伸ばそうね。」等、個に応じたコメントをようにしていきたい。

T： では、決めた目標を伝え合いましょう。手のあげ方が上手になってきたC1さん。
 C1： はい、勉強が難しくなっても最後まであきらめない。
 T： あきらめない。はい、いいでしょう。
 C2： 生活で相手のことを知るために、相手の気持ちを考える。
 T： はい。相手の気持ち。いいでしょう。
 C3： 意見をしっかり持つために、話を聞く。
 C4： 一日5回以上発表するために、先生の話をよく聞く。
 T： はい、よく聞く。いいでしょう。



右は、第2四半期の目標を決め、達成に向けて、これまでの学びをつなぎ努力した児童のキャリア・パスポート

3 子どもの学びの姿と今後に向けて

令和5年度QU結果を比較すると、11月調査では満足群が33ポイント増加するとともに、非承認群と不満足群が0名であった。このことから、学年全体で、教師も児童同士も肯定的・対話的に関わってきたことや学級の垣根を越えて子どもたちのよさを見取り価値付けたことが学校への満足感を高めることにつながったと考える。

項目	5月	11月
満足群	63%	96%
侵害行為認知群	8%	4%
非承認群	17%	0%
不満足群	13%	0%

令和5年度 QU結果

令和5年度町キャリア教育意識調査の結果を比較すると、わずかな減少が見られたものの

課題対応能力に関しては、9ポイント増加した。中でも、課題対応能力に関する項目の「知りたいことがあった時、自分で調べたり、人に聞いたりしている」「勉強する

基礎的・汎用的能力	5月	11月	増減
人間関係形成・社会形成能力	90%	93%	+3%
自己理解・自己管理能力	96%	95%	-1%
課題対応能力	89%	98%	+9%
キャリアプランニング能力	97%	96%	-1%

令和5年度 町キャリア教育意識調査

とき、自分で計画立てている」「何事にも、自分で考え、自分から取り組むことが大切だと思う」等において、肯定的に回答した子どもの割合が高まった。このことから、子どもたち一人一人のなりたい自分に肯定的・対話的に関わったことを通して、学びの意義や価値に気付き、自分で考え決めて学ぶことができるようになったことが伺える。

今後も、目の前の子どもたちに育てたい力を明確にして、子どもたち一人一人が前向きに学び続けることができるよう、学年みんなで共通理解を深めながら大切に育てていきたい。

未来社会を切り拓く資質・能力の育成
 ～関わり合い 個を磨き 笑顔かがやく授業の創造～

会津若松市立謹教小学校
 教諭 芹沢 志保

1 実践の内容・方法

(1) 教育課程の編成・実施・評価・改善について（教務主任として）

本校は、会津地域における研究推進校として、これまで46回にわたり、毎年6月に公開授業研究会を開催している。令和2年度からは、現在の「未来社会を切り拓く資質・能力の育成」をテーマに研究を進め、今年度は、副主題を「～関わり合い 個を磨き 笑顔かがやく授業の創造～」と設定し、第2期1年次の研究を推進している。

研究の内容としては、子供たちに未来にわたり社会で必要とされる資質・能力を育成するためにカリキュラムマネジメントを推進し、教科等横断的な教育課程を編成・実践・評価・改善することである。さらには、各教科、領域等において、学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）の育成を目指し、教科等横断的な学習の一層の充実を推進していくことが必要である。

私は、本校勤務3年目であるが、令和4年度から教務主任を務めている。上でも述べたように本校は、教科等横断的な教育課程を編成し、子供たちに学習の基盤となる資質・能力を育成することを研究の柱としている。そのため、教育課程編成会議の企画・運営についても、研修主任と連携して、教科等横断の視点に基づいた各種計画の作成や単元配列表（資料1）の見直しを行っている。また、今年度の反省に基づき、学校行事や教育活動について実施計画を立案し、教職員間の連絡調整を図りながら、スムーズな運営ができるよう努めてきた。

(資料1) **第5学年 単元配列表**

(各教科等の内容を関連付けることで、教科等横断的な学習の充実を図る)

月	4月	5月	6月	7月	8・9月	10月
国語	読んで、あなたのこと から見えるのっておもしろい 登場人物どうしの 関わりを伝え、感 想を伝え合おう ・伝えつけてよ	あいて、あいて、あいてみよう 文章の書き手とら え、自分の考えを 発表しよう ・発信する ・言葉の意味が分か るよ ・冒頭と結末	日常を十七音で 古典の世界（一） 目的に応じて活用するよ みんなが通じやすい町へ	同じ読み方の漢字 夏の日 新聞を読もう 歌謡	からたちの花 どちらを選びますか 新聞を読もう 歌謡 物語の全体構造をと らえ、考えたことを伝 え合おう ・たずねよう	漢字の読み方と使い方 秋の夕暮れ エッセイや短編の読み方 資料を用いた文章の効 果を生かして書こう ・国語力が磨えてくれること ・統計資料の読み方 ・グラフや表を用いて書こう
書写	いつも 気をつけよう	字の形	書くときの姿勢	漢字の組み立て		
算数	整数と小数のしく みをまよとのよう 直方体や立方体のかさ	変わり方を 調べよう かけ算の世界を 広げよう	わり算の世界を 広げよう 小数の 他	形も大きさも同じ 図形を調べよう	図形の角を 調べよう 整数の性質を 調べよう	分数と小数、整数の 関係を調べよう 分数のたし算、ひき 算を広げよう
社会	わたしたちの国土		わたしたちの生活と食料生産			
総合	最近の地産地消 水路による町づくり					
理科	天気の変化	植物の発芽と成長	魚のたんじょう	花から実へ	流れる水の 力	台風と天気の変化
特活	今日から特活 守給のめあて 体活動の計画	友達と仲良くしよう 委員会活動の計画 学習発表 運動会練習	植物の発芽の観察 おしるしをしよう 学校の問題について わたしたちの生活と情報	学習の問題について 1学期の反省 身体への計画	1学期の心構え 体の仕事について 運動会のめあて 新しい海産物	運動会練習 ボランティア活動 日の朝のまじり しらすはぎの計画

(2) 地域との連携・協働による教育活動の充実（地域連携担当教職員として）

本校は、昨年度創立150周年を迎え、会津若松市において最も歴史と伝統のある小学校の一つであり、地域の方々も本校及び本校の子供たちを支援していこうとする気持ちが非常に強い。また、学区には地域学校協働本部が立ち上がっており、地域コーディネーターも存在する。この地域コーディネーターとの連絡調整を行い、社会に開かれた教育課程を実践していく必要がある。本校は、学校経営・運営ビジョンの目指す学校像の一つに「地域とともに歩む学校」を掲げている。その実現のためにも、地域の方のご支援ご協力をいただきながら教育活動を充実させていくことは大変重要である。

私は、地域連携担当教職員として、年度末に次年度の教育課程において、地域の方々に支援をお願いしたい単元等を学年ごとに取りまとめ、地域連携年間活動計画（資料2）にして地域学校協働本部のコーディネーターとの打合せを実施している。この際、具体的な活動の時期や内容、必要とするボランティアの人数等をお知らせすることによって、地域コーディネーターも1年間を見通してボランティアを確保しやすくなっている。また、依頼した活動の前には再び地域コーディネーターと連絡を取り、当初の予定の変更点や学年主任からの要望等を伝えるなど、連携を深めている。

(資料2) **地域連携年間活動計画**

(年間を見通した地域人材活用の推進)

	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
二年	○生活科No.2 町探検（引率） （指導・交流）	●国語科 町探検感謝の手紙			○体育科 スキー（指導）		
三年	◎総合No.5 鶴ヶ城探検 （引率指導・ガイド）	○社会科No.6 店ではたらく人 （引率指導）		○書写 毛筆・書き初め（指導） ※特別非常勤講師 ○社会科No.7 消防署見学 （引率指導）	○体育科 スキー（指導）	○社会科 くらしの道具の移り変わり （引率指導） ○算数科 そろばん（指導） ※みとみ学園	●国語科 くらしの道具の移り変わり感謝の手紙 ●国語科 そろばん指導感謝の手紙
四年	○総合 森林環境学習・樹木観察（指導） ●鼓笛パレード	○総合 森林環境学習・樹木観察（指導）	●国語科 森林環境学習・樹木観察感謝の手紙	○書写 毛筆・書き初め（指導） ※特別非常勤講師	○体育科 スキー（指導） ○プログラミング教室（指導）	◎総合 福祉体験（指導・交流）	●総合 福祉体験感謝の手紙

(3) ICTを活用した授業改善（理科指導を通して）

本校では、GIGAスクール構想により、一人一端末が配置される前の2019年度から日産財団の理科教育助成を受けた。これによりiPadや書画カメラ等のICT機器を活用し、理科の授業を中心に、その効果的な活用に取り組んできた。理科において、学び合いによる授業を展開する際は、互いの観察や実験の結果について差異点や共通点を比較したり、考察を関連付けたりしながら、学びを振り返り、次に繋げていくことが重要である。しかし、いつでも実験が成功したり、再現できたりするわけではない。そこで、ICTを効果的に活用することで、子供自身が必要なときに必要な動画等を振り返りながら学びを充実させる環境を整備し、GIGAスクール構想により、一人一端末が配置される前から、ICTを効果的に活用した理科の授業の充実と子供たちのICT活用技能を高めることが必要であると考えた。

私は、理科の分科を担当しており、本校の理科部の一員として、まずは、子供たち自身にタブレットを身近なツールとして活用させようと考え、理科の授業において様々な場面でタブレットの活用を試みた。最初はカメラとして空や青虫を撮影させたり、タブレットに実験や観察の考察を打ち込み、電子黒板で共有したりしながら、まずはICT機器に慣れること

を優先して取り組んだ。その結果、子供たちは、理科の授業においてタブレットを活用することが当たり前状況になり、自分達で画像を共有したり、過去に撮影した動画を引き出して、振り返りを行ったりすることができるようになった。

① 実践例1 《 5年：理科「天気の変化」 》

最初は、各班に一つのタブレットしかなかったが、一人一端末が配置されてからは、さらに情報量が多くなった。校庭で動く雲の様子を撮影した際は、データが多く集まったことで、友達動画と比較しながら考察することができ、本校の研究で目指している「関わり合う中で、学び合い、個としての考えが深まっていく」授業が実現できた。



② 実践例2 《 4年：理科「雨水のゆくえと地面の様子」 》

異なる種類の土に水を染みこませる数秒間の実験を動画で撮影した。実際の様子を見て気付いたことについて何度も動画で振り返ることができ、根拠を基にした話し合いが活発に行われた。また、単元の導入には校庭の様子をiPadで撮影した動画を編集して使用したことにより、単元を通して、子供たちの学習意欲を持続させることができた。



2 成果と課題

(1) 教育課程の編成・実施・評価・改善について（教務主任として）

① 成果

単元配列表を作成し、総合的な学習の時間、社会科、理科、生活科を中心教科とし、他教科で関連のある単元に結び付けたことにより、各教科等の学習で身に付けた資質・能力を活用・発揮しながら中心教科の学習に取り組む子供たちの姿が数多く見られるようになった。つまり、教科等横断的な学習の充実を図ったことで、学習の基盤となる資質・能力が身に付いてきたと考える。また、学んだことを日常生活にも活用しようとする意欲が高まった。

② 課題

各教科・領域の学習において身に付けていく資質・能力と教科等横断的な学習で身に付けていく学習の基盤となる資質・能力との関連性を明確にしていく必要がある。

(2) 地域との連携・協働による教育活動の充実（地域連携担当教職員として）

① 成果

地域連携年間活動計画（資料2）を作成したことにより、地域コーディネーターも1年間を見通して、自分の活動予定を立てたり、人材を確保したりできるようになったと好評であった。また、教職員からも「地域人材を活用することで、様々な体験の機会が増え、教育活動の充実につながっている」といった声を多数いただき、「地域とともに歩む学校」の実現に寄与できた。

② 課題

校外学習等に地域の方にお手伝いいただくことは大変助かるが、事前の打合せ等の時間を確保することが難しく、逆に負担感を感じている教員もいる。

また、地域コーディネーターの都合もあり、教員からの急な要望には対応できない場合が多いため、できる限り年度末に先を見通した計画を作成してもらい、地域の方々に本校の教育活動に参加していただきたいと考えている。



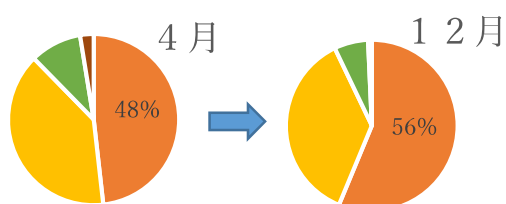
(3) ICTを活用した授業改善（理科指導を通して）

① 成果

4月と12月に、子供たちに学習に対する意識調査を行った。その結果を見ると、4月と比較して肯定的な回答を得られた項目が、12月では増加している。「主体的な学び」と「協働的な学び」に関する項目を見ると、「あてはまる」と答えた児童の割合が下のグラフのように変化した。ICTを用いて何度も事象を振り返ったり、互いの考えを関連付けたりしたことで、子供たち自身が学びの手ごたえを実感しながら授業に取り組むことができたことが推察できる。

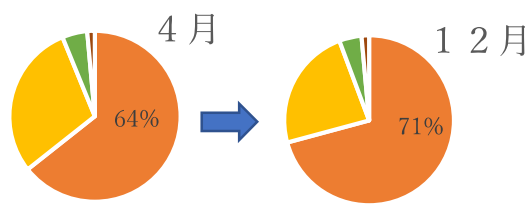
質問1

授業では自分からよく考える。



質問12

授業では友達と考えたり話し合ったりして手応えを感じる。



② 課題

現在は、一人一端末が実現して3年目となった。子供たちは、授業においてもタブレットを活用し、家庭に持ち帰って家庭学習にも活用している。タブレットの活用については今後もさらに推進していく必要があるが、それに伴って情報モラル教育の充実も必要不可欠である。

3 今後について

最近、小学校では、教員の大量採用に伴い、若手教員の比率が高くなっている。また、若手教員とベテラン教員の二極化が進み、30代、40代の教員が非常に少ない。本校においても学年2クラス中、1クラスは50代のベテラン教員、もう1クラスは20代の若手教員という構成となっている。ベテラン教員と若手教員では、指導力にも大きな差があり、保護者も不安を感じている。私は教務主任として、これからの大きな課題は、若手教員の育成であると考えている。ベテランも若手もともに研修を重ね、保護者、子供に不安を感じさせない教育活動を展開するために引き続き尽力したい。

子どもの学びを支え学校経営改善に寄与する学校事務職員を目指して

只見町立明和小学校
主査 舟木 希

1 はじめに

南会津地域は小規模校が多く、特に近年は複式学級の増加に伴い教職員数が減少し、人手不足が学校運営上の課題となっている。また、本町では学校運営協議会（コミュニティスクール）がすべての小中学校に設置され、地域とのつながりも強く効果的な地域連携の在り方が求められている。教職員一人あたりの校務分掌が増え負担も大きくなっている現状において、学校事務職員として出来ることは何か、学校経営への参画から課題解決を目指し、以下の取り組みを行った。

2 実践内容

(1) 財務からのアプローチ

①学年会計の見直し

本校では南会津郡事務研で標準化に取り組んだ「校内会計取扱要項」に基づき、各種会計を執行している。学校事務職員は会計主任に位置付けられ、これまでは、学年会計（学級費・教材費）については主担当を学級担任に充てていたが、会計業務効率化と複式学級で2学年分の会計を持つ教員の負担軽減のため、会計主任を主担当とした。また、学級費については、只見町学校事務共同・連携グループにおける見直しの取り組みから廃止することとした。学級全体で使う物品は基本的に公費負担、遠足の費用など徴収すべき経費は教材費の口座引き落とし日に合わせ、その都度集金としたことにより、担任の学級費管理と年度末の返金業務が軽減された。

②購入物品の紹介

児童玄関近くにある「メッセージ黑板」で、購入した物品の紹介を行ってきた。現物も合わせて展示しておき、ほぼ全ての児童が登校時に見たり触ったりして時には感想を聞くこともあり、公共の物に関心を持たせるきっかけになると同時に教職員への周知も兼ねている。毎回、税金や資源回収の収益など公の財源で購入したことを伝えるとともに、特に資源回収等の保護者や地域の方々からたくさんの協力をいただいている部分について、児童自身の活動と物品を結びつけることで身近に「明和地区」を感じる機会と位置付けている。



展示物に触れる児童

③環境整備への関わり

校内の補助金の申請や請求、報告までを一括して学校事務職員が担うとともに、特に環境整備（緑化）においては、担任外の教職員と協力して取り組みを進めている。苗や球根の定植ひとつをとっても、児童数が少ない本校においては人数と時間の確保が困難である。そこで、児童の自主性に期待し、給食時に「昼休み、遊ぶ前に花を植えるお手伝いをしてくれる人を募集します」と呼びかけボランティアを募った。昼休みになり、我先にと校舎から飛び出してきた児童を役員と迎え、100本近い苗を植えることができた。上学年が下学年に手本を示し作業する姿も見られ、児童からは「またいつでも、たのんでください！」と、嬉しい声掛けがあった。



資源回収の収益で購入した物品

(2) 新たな役割からのアプローチ

○地域連携担当教職員として

これまで教員が担っていたが、令和5年度から主担当として関わることとなった。教員よりも対外的なつながりの多い学校事務職員の立場は行事等での連絡、調整において効果的であろうと考え、次の取り組みを行った。

・ESD（持続可能な開発のための教育）への関わり

明和地区にある3つの伝統芸能について、児童が保存会の方々から教わり、継承し、発表する学習に取り組んでいる。地域連携担当教職員として、日程調整と練習場所の確保、必要物品の確認と購入、月ごとの実績報告作成と提出を行った。校内の事情を把握したうえで窓口となり一人で複数の保存会と調整できたことは、学年担任がそれぞれ対応するよりも、双方にとって効率的であった。

・地域連携コーディネーターとの調整

本校では、地域の特色である雪を生かしくロスカントリースキーに取り組んでいる。競技経験のある保護者に指導をお願いしてきたが、お子さんの卒業で依頼が困難になり、対応に苦慮していた。そこで、地域連携コーディネーターに相談し地域人材を紹介していただくとともに、町教委の事業ともタイアップし講師謝礼を指導回数分確保した。充実した活動を目指すと同時に、子どもたちのためと休暇をとり協力してくださる方々に対し、予算的な裏付けは不可欠である。

・感謝の会運営

登下校の見守りや読み聞かせボランティア等でお世話になっている地域の方々を学校に招待し、給食の時間に感謝の会を行った。数年ぶりに児童・招待者が会食することとなり、実施案の作成と提案、招待者のリストアップ、出欠の集約、給食センターとの調整、席表示の準備等々苦勞する場面もあったが、「子どもたちと話せて良かった」「また呼んでほしい」という声とともに、交流を楽しむ姿に充実感を覚えた。

・学校運営協議会への参加

年に3回開催される学校運営協議会に出席し、授業参観、熟議にも加わった。課題に対し学校側として意見を述べるに留まったが、今後地域の方々と共に具体的な行動を起こす際には、調整役として関わりたい。



感謝の会実施案↑と会の様子↓



3 成果と課題

教職員の負担軽減と地域連携の充実を軸として実践してきたが、様々な業務に学校事務職員が関わることにより財務的な視点からのスリム化、効率的な運営ができた。また、外部との交渉や調整を通して地域連携活動への知見が深まったことも成果としてあげられる。

平29年3月の学校教育法第37条改正により、私たち学校事務職員は事務を「つかさどる」職となり久しい。未だその解釈は様々に存在するが、私は「学校の課題に対し、地域や関係機関とつながり、学校での知見を生かして解決に向け参画すること」ととらえている。学校規模の大小による課題は、多様かつ複雑であり、多忙化についても、教員の業務をいくつか肩代わりすることで解消されるような単純な問題ではない。私は、今後も「教育の質の確保と向上」「教員が指導に専念する時間の確保」を念頭に置きつつ、教科指導以外の業務すべてに関わるつもりで取り組んでいきたい。

全国への挑戦 ～学校の環境を最大限に生かした陸上部の練習の工夫～

福島市立福島第四中学校
教諭 三瓶 和久

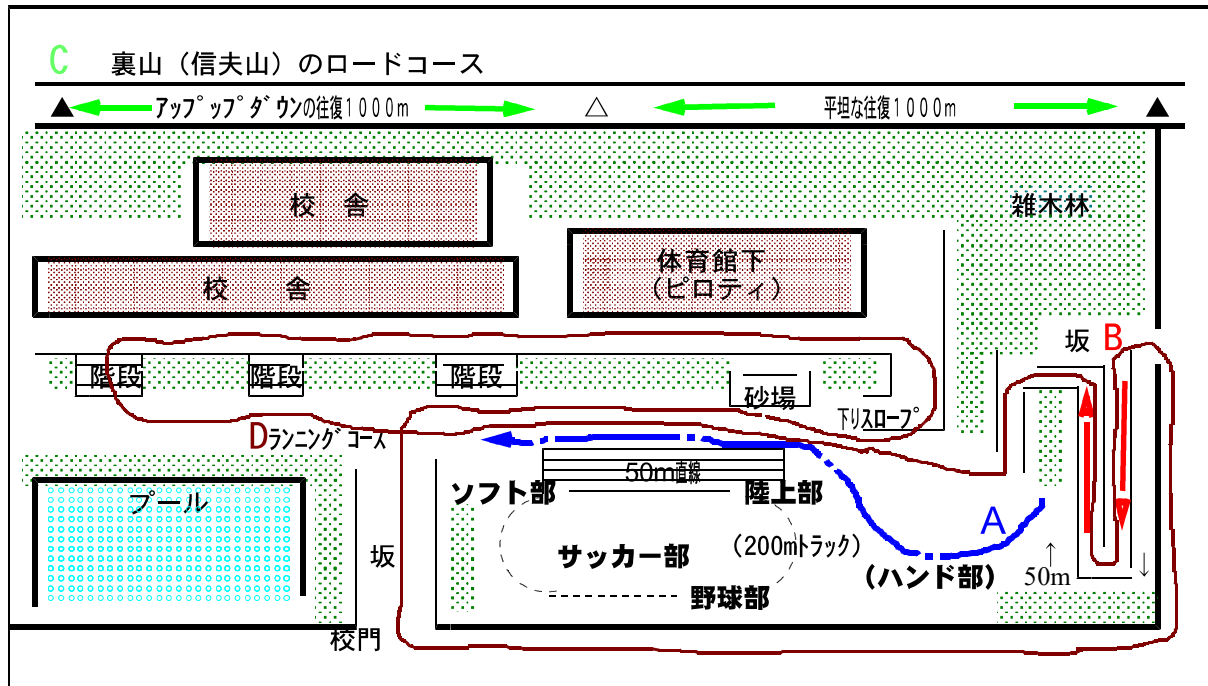
1 本校の部活動環境の現状と実践内容

本校のグラウンドは福島市の信夫山の中腹に位置し、校庭は200mトラックがやっと入る広さである。そのグラウンドに、ソフトボール部、サッカー部、野球部、ハンドボール部そして陸上部の5つの部が入り、協力して練習を行っている。さらに駐車場に行くためには、その狭いグラウンド内を授業中や部活動中問わず、業者などの車が横切らざるを得ず、その都度活動が中断する状況である。そのため200mトラックを使用している練習は、ほとんどできないのが現状である。

体育館においても、男女バスケットボール部、男女バレーボール部、男女卓球部、男子ハンドボール部の7つの部がローテーションで使用している。

このような状況下でどのように工夫して練習をしているか、一部を紹介したい。

〈福島第四中学校校舎略図〉



(200mトラック)

(1) 学校の環境を最大限に生かした練習

- ① アップは50mの直線上のみで行っている。基本はジョギング、体操、動的ストレッチ（走ドリル）、ハードルドリル、ラダートレーニングそして50mの流しと50mのダッシュとなる。ハンドボール部のコートが空いているときは、Aのようなコースによる100mの流しを行っている。一部カーブが左右逆になるが、体のバランスを保つのに役立つ。長距離ブロックのインターバルトレーニングにもAのコースを一部距離を伸ばして使用している。
- ② B地点において50m+カーブ+50mの坂がある。50mのショートの坂ダッシュや連続の100m坂ダッシュなど組み合わせてトレーニングを行っている。

- ③ C地点の裏山のロードコースで△を起点に左右に往復1,000mのコースを設定して持久力系のトレーニングを行っている。地形を生かしたアップダウンのあるコースと平坦なコースを組み合わせている。

学校裏の信夫山のランニングコースは並木道になっており、夏場でも涼しい環境で練習をすることができる。熱中症等の危険性が低い環境のため、夏休みの練習では積極的に活用している。

- ④ Dのランニングコースは、グラウンドと校門の坂、B地点の坂、階段を使用しての8の字のコース(約1.3km)となっており、クロスカンントリーコースとして陸上部以外の多くの部活動でもトレーニングに利用している。

- ⑤ 校地内の階段や校舎前の犬走りなどを使ってのサーキットトレーニングを実施している。階段や坂道の多い学校の敷地内を利用し、運動負荷をかけながら効率的に移動し、10種目程度のトレーニングを行っている。

(2) 自主的なブロック別練習

毎日30名程度の部員で練習している。基本は50m直線の付近で行うが、砲丸投の投てき練習は下りスロープを利用したり、走高跳の跳躍練習は体育館下のピロティ(下地はコンクリート)でマットを設置して行ったりするなど、ブロック別練習は他の部活動の実施状況に合わせて練習可能な場所に分かれて行うことが多い。その中で、上級生が中心となって練習を組み立て、代々の練習方法や技能が引き継がれ、自主的に教え合う雰囲気ができている。教師側の指導は練習場所を回りながら、アドバイスする程度にとどめている。

(3) 学校の普段の練習が競技場練習に生かされる

月に2~3回程度、週末に陸上競技場での練習を行っている。その練習は種目ごとに行う練習を基本としているが、ここでも普段自分たちが考えて行っている練習を取り入れて行っている。何よりも広々とした練習環境の中で思い切り体を動かして練習できることに喜びを感じ、のびのびと練習する姿が見られる。

(4) 朝の清掃活動

本校では毎朝、陸上部はもとより部活動ごとに当番制で校舎内外の清掃活動を行っている。どの部活動でも先輩と後輩が仲良く清掃する姿が見られ、生徒同士の望ましい人間関係が形成されている。また、清掃活動を通して、与えられた環境に感謝する気持ちを育むためにも大変有効である。このような活動も、大会等で各部が好成績を収めている一因であると考え

(5) 通学環境

本校生徒は、校門から約100mの急な坂道と約40段の階段を昇り、昇降口にたどり着く。冬場でさえ汗をかいて登下校するほどである。それが毎日の足腰の鍛錬になっており、部活動にも生かされていると考えられる。

2 実践の成果

(1) 生徒の自己マネジメント力の向上

部活動において、学校の設備や環境だけが試合結果を左右させるものではない。各学校が置かれている環境は様々であるが、生徒と共に練習方法を考え、工夫していくことで生徒たちの意欲や意識も高まり、練習の効果も上がってくるものであると考える。

自主的に行っている種目練習においてもそれぞれのブロックの工夫がある。例えば長距離ブロックでは、ある生徒が後半に強くなるという目標を立て、校門からの長い急な坂を流しで上った後、そのまま40段の階段を最後まで素早い動きで登りきる練習を行っていた。このように自己の課題から練習環境を生かしたトレーニングを考察し、実践していく自己マネジメント力の向上が見られる。

(2) 上位大会への出場

現在、本校の陸上部には小学校で実績を残してきた生徒はいない。しかし、陸上に取り組む姿勢は他の学校の生徒にも負けない。その生徒たちが結果を出し、笑顔を見せてくれたことが私の大きな喜びとなった。

今年の福島県中体連陸上大会では、男女7種目で入賞し、そのうち共通男子走高跳と共通女子4×100m R で東北大会と全国大会への出場権を得ることができた。また、共通男子走幅跳と共通女子砲丸投でも東北大会に出場する活躍を見せた。

新人戦でも1・2年生が活躍し、先輩の意思をしっかりと引き継いでいる。来年以降の活躍も期待できる場所である。

3 課題及び今後の取組の方向性

昨年の県新人大会でも多くの入賞者を出すことができ、その生徒たちが強化指定選手となり福島県ジュニア強化部の練習会や合宿等に参加している。そこで、多くのことを学び学校に持ち帰って練習に取り入れたり、後輩に伝授したりする姿が見られた。

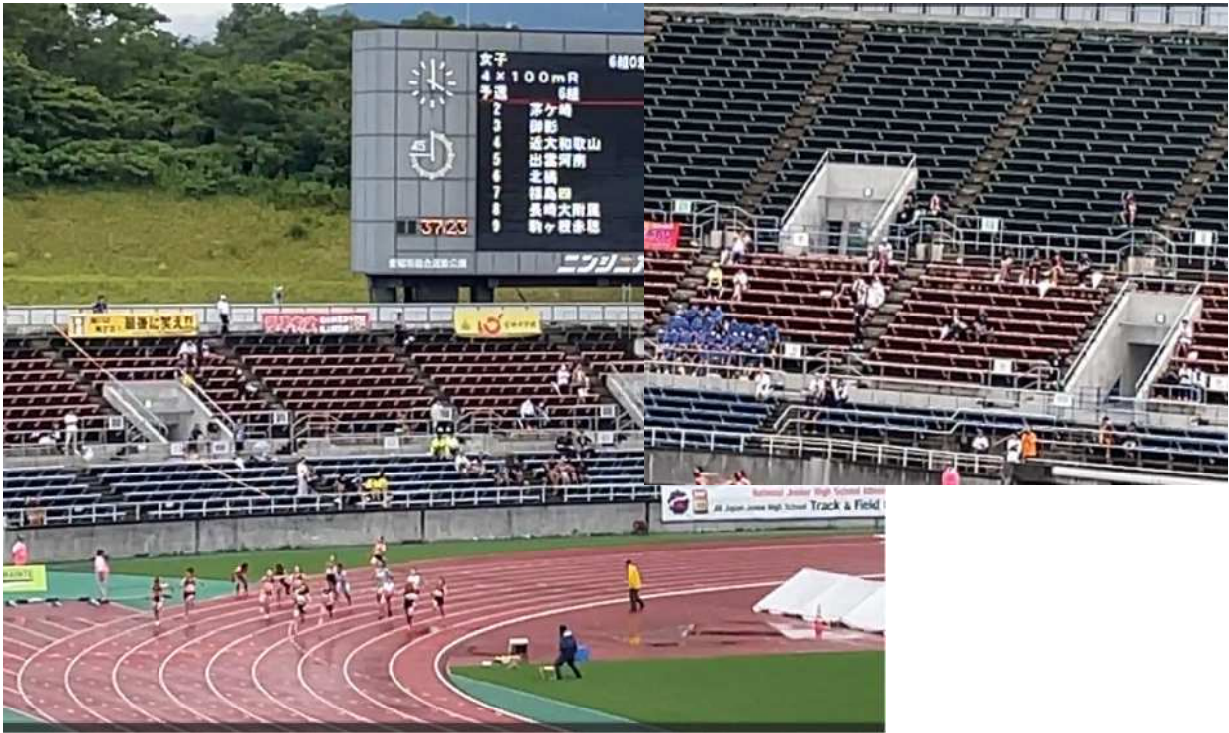
練習環境が整っていないからこそ、生徒たちは工夫し、自分たちがやってきたことを後輩に伝える伝統が福島四中には根付いていることを感じる。これは、私が顧問になってからやり始めたことではなく、代々の顧問の先生方が伝統として指導



し、残していただいたからだと思う。

【全中出場の走高跳の選手】

今後も良きものは残し、与えられた環境でできるより良いものはないかを探っていきながら陸上部の顧問として研鑽していきたいと思う。



〔全中出場の女子4×100mRの選手〕

理科好きな生徒を育成するための教材教具についての実践事例

二本松市立二本松第一中学校
教諭 渡邊 恵美

1 実践の内容及び方法等

(1) 生徒の主体的な活動を促す補助教材の工夫、活用

① 単元学習ガイド

単元の学習前に配布し、予習として行わせることで、今後授業の中で出てくる語句をあらかじめ知ることができる。

事前に語句とその意味を知っておくことで、課題解決において自己の考えを表現する際に有効にはたらく。

赤枠で囲った部分(授業のまとめチェック)は毎時間行っている②スキルアップトレーニングとして活用しており、知識の定着へつなげている。

② スキルアップトレーニング

めくると、裏には解答が書いてあり、すぐに自分で確認できる。
(両側合わせて2回分実施可能)

毎時間、授業開始5分前に行っている。目標時間を設定し、その時間内に約30問程度を解く。自己採点ができるように、裏側に答えを印刷し、1枚につき2回分テストができるようにした。また、両側をめくると答えがすぐにわかるように作成した。重要語句を繰り返し書くことになり、基礎・基本の定着に効果が出ている。

(2) 身近なものを用いた教材、教具の工夫による観察、実験

① 教材の開発及び工夫



自作のジェットコースターモデルを準備した。配線用カバーを木材に固定し、その上に球を転がすことができるようにした。一方は斜面の下り坂からそのまま平面を進むように、もう一方は木材の切り込みを利用して、下り坂の後ろに登り坂や下り坂をつくれるようにした。

② パワーポイント

実写したものを使って視覚化を図った

【重力について】
椅子を消すと・・・どうなる？
↓
スイカもヒトも下に落ちてしまうだろう？
↓
はたらいっている力は・・・

【「力」が見えるスイッチ】
「力」が加えられる物体のみが見える。
チカラスイッチ1
重力が見える。
チカラスイッチ2
チカラスイッチ3
横しているものから受ける力が見える。

【力を見つけるポイント】
① 地球上の物体には必ず重力がはたらく。
チカラスイッチ2
② 物体に触れている箇所には力がはたらいっている。
チカラスイッチ3

③ タブレット (MetaMoji 使用) の活用

化学変化を視覚化



【予想】実験によって誰に現れる形質の比は・・・？

メンデルが考えた実験のみ(子)の観察実験による結果内にある形質の割合をどうなるであろうか？ 結果のみを予想して書きましょう。	形質の比 (顕性形質 : 顕性形質) = 7 : 3	形質の比 (顕性形質 : 顕性形質) = 3 : 1
形質の比 (顕性形質 : 顕性形質) = 3 : 1	形質の比 (顕性形質 : 顕性形質) = 3 : 1	形質の比 (顕性形質 : 顕性形質) = 3 : 1

孔雀石(マラカイト)から銅を取り出してみよう

【化学反応式】
 $Cu_2(OH)_2CO_3 \rightarrow 2Cu + CO_2 + H_2O$

★モデルで化学反応式を表してみよう

孔雀石(マラカイト) 18g

【実験手順】
① 熱める。
② 高い位置で加熱(0.1g)で還元する。
③

【実験をする上で注意すること】
加熱した液体が試験管の内部に流れないようにする。
加熱する試験管の底を上げる。
クランプの位置は口の右にする。
止めるのは気体が発生しなくなってから。

【観察】
 $Cu_2(OH)_2CO_3 + C \rightarrow 2Cu + H_2O + CO_2$

【結果】
銅の白い粉末が生成した。
CO₂ ← 石灰水で検出。
H₂O ← 乾燥剤で検出。
銅は赤い粉末が生成した。

▲タブレットに個人の結果を予想したものを入力し、それを使って相互の伝え合う(実際)



その他、顕微鏡で観察したものを撮影して全体に見せたり、班活動の中で原子モデルを作成して化学変化を視覚化して表し考察したりする時などにタブレットを活用した。どちらも使い慣れるまでは少し時間がかかるが使いこなすことができると、授業の内容に深まりが出てくる。

▲生徒がタブレットで撮影したもの(実際)

(3) 生徒の主体的活動を促すための評価の工夫

① 事前・事後シート

コア知識(単元の重要語句)

遺伝の親別性と遺伝子

事前

事後

事前のシートには「遺伝の親別性と遺伝子」に関する基本的な知識が書かれている。事後のシートには、より詳細な理解や自分の考えが書かれている。

事前と事後において、コア知識(重要語句)を使って文章作成を行なった。この取組により、生徒たちは自分自身の知識の深まりを目で見て明らかに知ることができる。新たな学びへの意欲の高まりを実感できたようだ。教師側にとっても、生徒一人ひとりの理解度を把握でき、加えて学習評価にも使用できたので効果的だった。

単元を通しての感想には、さらに学びたいことや興味・関心をもったことについて書かれてあるものも見られた。

② シラバス反省表

- 《確認テストの点数》
毎時間授業の始めに行う、前時の学習内容を問う問題の点数を記録。
- 《学習内容と目標》
この単元の学習の流れと観点別学習目標を知ることができる。【シラバス】
- 《相互評価の欄》
隣の人や同じ班の人に自分の学習状況を記入してもらう。
- 《学び方アドバイス》
学習目標を達成するための各自における具体的な学習の取り組み方を教える。
- 《重要語句の確認》
本時の重要語句を記入することで、知識の定着を図ることができる。
- 《感想等》
質問や疑問には、教師が朱書きして答えるようにする。

月/日 曜日/時間	学習内容 ●観点別学習目標	学習内容の理解度 (自己評価)	隣の人から見た自分の取り組み (記入者名)	学び方のアドバイス	本時の学習で身につけた大切な内容 重要語句(キーワードなど)	今日の授業の疑問点や感想 どこが楽しかったところや感想など	確認印
1/2 月曜日	観察2 花柄管がのびるようす ●花柄管がのびるようすを興味、関心をもって観察している。 ●観察順序正しく操作しながら、花柄管が伸長するようすを観察し、動画を撮って記録できる。	A B C D	(A B C D) 氏名 ()	●観察方法を覚えてくる ●教科書の観察結果を予習の意味で読んでくる ●観察結果をしっかりと記録に残す。気付いたことをたくさんメモする	(花柄管の伸びの様子)の動画、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	花柄管の伸びの様子、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	
1/5 木曜日	観察2のまとめ ●植物の有性生殖とそのしくみについて、花柄管や生殖細胞といった用語を用いて説明できる。 ●無性生殖による植物のふえ方を理解し、向きあけて説明できる。	A B C D	(A B C D) 氏名 ()	●ワークの練習問題を行って、学んだことをしっかりと定着させる ●復習を行い、わからないところを早めに教師に聞くようにする	花柄管の伸びの様子、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	花柄管の伸びの様子、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	
1/5 木曜日	動物の生殖 ●受精前や幼生(おたまじゃくし)になるときの変化を説明できる。 ●多くの動物が有性生殖であることを説明できる。 ●有性生殖では、受精卵が細胞分裂をくり返すことによって、かこの各部分がつくられること、説明できる。 ●1細胞の動物の受精卵の細胞のふやし方を説明できる。	A B C D	(A B C D) 氏名 ()	●教科書の内容をよく読み、予習しておく ●ワークの予習 ●自主学習ノートに重要語句をまとめる	花柄管の伸びの様子、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	花柄管の伸びの様子、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	
1/5 木曜日	有性生殖と無性生殖の特徴 ●減数分裂では、染色体が半分ずつ生殖細胞に配られ、受精	A B C D	(A B C D) 氏名 ()	●教科書の内容をよく読み、予習しておく	花柄管の伸びの様子、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	花柄管の伸びの様子、観察結果の表、観察順序の表、観察結果の表、観察結果の表	

生徒たちにも、「単元構想シート」にあるような学習活動や内容を明記して【シラバス】、次時の学習予定や評価方法を伝えることや、「学び方のアドバイス」を示したことで、主体的に探究する力が高まると考え、実践している。この「シラバス反省表」は、「授業の流れがわかって良い」といった生徒の感想も多く見られ、反省表を用いて、授業後ごとに振り返りを実施できたことで、「わかる喜び」を実感・納得していかせることに大変有効であった。また、「学びのアドバイス」を入れたことにより、シラバスに掲載している学習目標を達成するために必要な家庭学習の取り組み方も知らせることができ、前述したように主体的に探究する力を高めるのに効果が見られた。

2 実践の成果

(1) 生徒の主体的な活動を促す補助教材の工夫、活用

「単元学習ガイド」、「スキルアップトレーニング」、毎時間の「授業ワークシート」、「話し合い活動のための手引き」、「ステップアッププリント」など、ほぼ自作によるもので、長年使用していく中で、工夫・改善を繰り返し、今現在の形となり、生徒たちにとって効果があるものになった。このような教材は単発的に使用するのではなく、継続して使用していくことにより大きな効果を生むことを実感できた。

(2) 身近なものを用いた教材、教具の工夫による観察、実験

教材の開発及び工夫を考える上で、まず教師自身が、その教材を見て「なんだろう?」「不思議だなあ」「おもしろそうだ」「やってみよう」と思えるようなものでなければならない。加えて、一生懸命に作り上げた(探し出した)教材ほど、生徒たちは食いつき、反応も良く、興味・関心をもって実験・観察に取り組む。100円ショップやホームセンター、書籍やインターネット等で得た様々な情報に加え、個人で申し込んだ研修等で得た情報をもとにした教材・教具の工夫・開発を今後も続けていきたい。また、タブレットを使用することが多くなってきているが、タブレットを使うことを目的とするのではなく、教具の一つとして使うようにし、今後もその良さを最大限に生かして活用していきたい。

(3) 生徒の主体的活動を促すための評価の工夫

自分たちで課題解決したことが生徒の中に達成感・充実感として残ったり、テストの成績などに数値として現れてきたりすることが生徒に主体的活動を促す要因の一つであることがわかった。また、理科の場合、自然現象と学習した内容とのつながりが見い出せたときも「理科がおもしろい」と感じ、もっと調べたいと思う主体的活動につながることもわかった。「事前・事後シート」、「シラバス反省表」は生徒個々にそれを気づかせてくれるものとなり、教師側でコメントをして返却し、授業でも活用することでよりその主体的活動が促された。

3 課題及び今後の取組の方向性

課題としては、これだけの実践を授業の中に取り入れていくには、日頃からの積み重ねが重要である。やり慣れるまでには時間を要することも念頭に置いて、根気強く継続していく必要がある。また、マンネリ化を防ぐためにも、これからも工夫・改善をしていくようにしたい。

今後の取組の方向性としては、生徒たちにとって成果が見られた実践に関しては継続をしていくことである。また、より良い実践となるように日々改善を加えて取り組むことも忘れてはならない。確かな学力を身に付けさせることは当然であるが、理科の楽しさ・おもしろさを伝授し、「理科好きな生徒」を増やすことを念頭に今後も指導をしていきたいと考える。

学校教育活動全体を通じた音楽教育の充実について

郡山市立郡山第二中学校
教諭 本田 あゆみ

1 はじめに

音楽科の最終目標は、子どもたちの豊かな情操を養うことであり、また、本校は「文化の香りと学力、そして魅力度・満足度の高い学校」を目指して、全教職員で一致協力して学校の教育活動に当たっている。とりわけ文化の香りに関しては、音楽教育の果たす役割が非常に重要であることは間違いない。しかし現在、音楽科の授業時数は、1年生で週約1.3時間、2，3年生にいたっては週1時間しかない。このような状況の中で、いかに「文化の香り」を高めるかを考えたとき、まずは、音楽の授業をいかに充実させ、生徒一人ひとりに音楽の基礎力を身につけさせるかを第一に考えた。さらにその基礎の上に、合唱コンクールなどの学校行事の指導において、生徒の思いが形になる表現力を磨く指導、また、顧問を務める管弦楽部の部活動など学校教育活動全体をとおして音楽教育の充実を図る必要がある。

以下、音楽の授業、学校行事における音楽指導、管弦楽部の部活動指導を関連づけることにより、学校教育活動全体を通して行った音楽教育の充実について述べる。

2 音楽の授業について

音楽の授業については、本校全学級の授業を担当していることを生かして学校全体で統一感のある指導を行うことが可能であった。音楽の基礎力となる、読譜力を身につける学習の他、聴音にも力を入れた。器楽ではアルトリコーダーやギター、和楽器演奏など幅広い活動を通して、生徒の音楽を愛好する心情を育てることを第一に、授業研究に努めた。その中で、今年度は本校の現職教育のテーマに即して特に合唱指導において、次の3点について工夫した実践を行った。

(1) みんなでやり抜こうとする雰囲気醸成するための工夫

① 成果

授業導入段階で、自分の歌唱（前時の自分の動画）について確認させ、個々の課題を設定させた。各自の課題を共有することによって、本時の目標・課題設定が明確なものとなり、生徒一人ひとりが自分の課題達成のために何をどうすればいいのかわいらしい方法で課題を追究するなど、主体的な活動が見られた。また、個々の努力や向上点を相互に認め合う時間を設け、互いに賞賛し合うことで、合唱活動の喜びや楽しさを分かち合い、自信を持って活動する姿が見られた。一人一人が一生懸命に取り組むことが、学級全体の歌唱力向上につながっていくという自覚が生まれ、その結果、全員で課題を達成していこうという雰囲気が醸成された。

② 課題

個々の歌唱力、歌唱に対する意欲、学級の人間関係や雰囲気によって、授業展開に差が生まれてしまった。歌唱技術を向上させるとともに、歌唱意欲を喚起させるまでに学級間で差異が生じてしまった。授業外での生徒との関わり方や、生徒の全人的な理解、授業でのレポートが図れる関わり方などをさらに工夫していきたい。

(2) 課題設定と課題を達成させるための工夫

① 成果

正しい音程で歌えるように「1フレーズだけ」のように歌唱範囲を決め、他のパートと一緒に、つられないで歌えるようになるまで、反復して歌唱させた。テンポを変え、音高のイメージを持たせ、他の音を聞きながら歌えるまで反復させることで、歌唱力が定着していった。正しい音程で歌えるようになると、合唱そのものに対する意欲の向上も見られた。また、生徒相互での教え合い、支え合いの活動を積極的に取り入れることで（後述する、管弦楽部の生徒など音楽に対する興味関心が高い生徒を中心とした教え合い、支え合い）生徒が主体的に学び合い、高め合う姿など「主体的・対話的で深い学び」を実現することができた。

授業の終末ではICT機器を活用し、各自の歌唱や全体の演奏を録画し相互に鑑賞し合い自己評価や全体での評価を実施することで、次時の目標設定に効果的につなげることができた。

② 課題

正しい音程の定着とともに、正しい発声方法など身につけさせたい技能が多くあるが、一人一人課題が違うため、限られた時間で効率よく指導できる方法、いわゆる学習の個別化をさらに工夫していかなければならない。

(3) 個別指導の工夫

① 成果

一人ひとりへの助言や成長した点を積極的に認めることによって、自信をもって歌唱できるようになった。また、音程が正しくとれない生徒は、休み時間等に個別指導を行うことによって、歌う意欲を向上させることができるなど「主体的・対話的で深い学び」を実現するための基盤とすることができた。また、集団の中の一員として、自分の役割を果たすための誠実な取り組みの大切さを教授する機会にもなった。

② 課題

授業の中で行える個別指導には限界がある。週に1時間しかない授業であるため、いかに時間を確保して繰り返し指導できるかが問題となる。そのため、多くの生徒に共通な指導事項については、次項で述べる学校行事における音楽指導でも繰り返し指導するように配慮した。



【主体的・対話的で深い学び】

3 学校行事における音楽指導

入学式や卒業式など儀式的行事においては式歌を歌う機会は、重要な音楽教育の一環であり、特に卒業式は1, 2, 3年生、それぞれの学年にとって集大成となる場となるため、音楽の授業との関連を重視して指導することとした。

特に、新型コロナウイルス感染症が蔓延していた頃は、全校合唱はおろか学級の合唱さえ感染リスクの高い教育活動として厳しい制限が加えられていたこともあり十分な指導ができなかったが、現在ではそれも緩和され効果的な指導ができるようになった。

文化祭における合唱コンクールは、特に音楽の授業と関連が深く、また生徒のモチベーションも高いため、音楽教育のさらなる充実が期待される。

(1) 校歌・式歌指導における音楽教育の充実

① 成果

入学式における校歌の指導については、新2, 3年生は卒業式での指導の成果が十分に残っているため、短時間で行うことができた。しかし、年度初めということもあり、入学式終了後においても、改めて音楽の授業において校歌の指導を適切・効果的に取り入れることにより、以後の歌唱指導の基盤とすることができた。2, 3年生については、入学式終了後に多くの賞賛を受けたこともあり、非常に積極的に歌唱学習に取り組むことができ、学校行事での指導と授業が相互に良い影響を与えられたと実感できた。

卒業式の式歌指導においては、学校の音楽教育の1年間の集大成として位置づけ、全校生徒に音楽の授業はもちろん、全校集会等においてその意義と重要性について指導するとともに、音楽教育の観点からこれまでの学習の成果の発表の場であるという自覚を持たせた。

このことにより、生徒は式歌練習を音楽教育の一貫としてとらえ、卒業生ばかりでなく、1, 2年生も主体的に式歌の練習に取り組み、より一層の音楽教育の充実を図ることができた。また、思いを形にすることができる歌唱を通して、誠実に音楽に向き合う生徒の姿から、それぞれの学年の心の成長を感じることができた。

② 課題

コロナが5類になり、全校生で歌唱する機会も少しずつ戻ってきたとはいえ、昨今は夏の熱中症対策など、1学期終業式や2学期始業式などを放送による実施に切り替えることもあり、1年間を通して全校生で一堂に会して合唱する機会を設けることが難しくなってきた。

(2) 合唱コンクールの指導における音楽教育の充実

① 成果

合唱コンクールの指導については、授業におけるICTを活用した個別最適な学びや、後述する管弦楽部員など学級のリーダーの積極的な関わりなどにより、生徒一人ひとりの歌唱力はもちろん、学級全体さらには学校全体の歌唱力を飛躍的に高めることができ、音楽教育の充実につながった。郡山市内の中学校の代表学級が演奏を披露する「郡山市音楽学習発表会」では、本校の代表学級の歌唱について多くの学校関係者の方々から高い評価を得たことから、歌唱力の向上を実感することができた。

4 部活動（管弦楽部）を通した学校音楽教育活動の充実

管弦楽部に入部する生徒は、音楽に興味・関心が高い生徒が多く、部活動の指導を通して学級や学年における音楽教育のリーダーとして育てば本校の音楽教育のさらなる充実が図られると考えた。部活動はあくまでも教育活動であり、コンクールのためだけの活動や練習に終始することなく、生徒の自主性を重視し部活動で学んだことや身につけたことを、音楽の授業や学校生活の中で望ましい形で発揮していくことを生徒には求めて、部活動指導を行ってきた。

（1）部活動を通したリーダーの育成

① 成果

合唱コンクールでは多くの管弦楽部員が学級の指揮者や伴奏者、パートリーダーなどを進んで引き受けたり、音楽授業における対話的な学びではリーダーとしての役割を遺憾なく発揮したりするなど、授業の活性化に寄与することができた。

② 課題

管弦楽部以外の生徒にも、活躍する場を意図的に設定してきたがまだまだ多くの生徒の音楽の資質・能力を向上させることができる余地がある。

5 まとめ

音楽科教員として、音楽科の役割はこどもたちの心を育てること、豊かな情操を養うことであると考ええる。その中には、我慢することや辛くても努力し続けることなど、人間力を育むことも含まれている。学校生活のあらゆる場面での生徒との関わりを通して、生徒の理想とする自己像や願いなどについて、理解を深め、それらを実現するために、少ない授業時間の中でいかに学校の音楽教育の充実に取り組むべきか今もなお模索しているところである。教えるべきことは、生徒ができるようになるまで繰り返し教えること、生徒の思いを形にできるまで、時間や労力をいとまず、指導にあたることで、生徒ははじめて主体的に学ぶことができるようになるのだと改めて感じた。限られた少ない時数の中での音楽教育の充実に関しては、今後さらによき方向へと発展、進化に努めなくてはならないと感じる。今回の受賞に満足することなく、さらなる研鑽を積み、指導力向上に励んでいきたい。



【日本学校合奏コンクール2年連続日本一を受賞して】

「学びに向かう力」を育む少人数・習熟度別学習指導の実践

郡山市立郡山第五中学校
教諭 吉田 由美子

1 はじめに

将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会や、グローバル化が進展する社会に、どのように向き合い、どのような資質・能力を育成していくべきか。また、一人一人が幸福な人生を生きるためには、どのような力を育てていくべきか。この問いを土台に、本校では2018年より3学年の数学科において、習熟度別学習指導を取り入れた授業を通年で実施している。

習熟度別学習は、一般的に問題を速く正確に解くための知識を獲得する個別学習が主であるという印象が強い。しかし、学校の授業における最大の強みは、他者と協力しながら柔軟に問題解決を目指す協働的な学びが可能なことである。集団による学びの練り上げにより、思考に深まりをもたせ、確かな学力の定着とともに、学びに向かう力を育むことが期待できる。

本校での実践も含め、私自身のこれまでの経験から、少人数・習熟度別学習指導によって、学力の伸長をはじめ様々な効果が上げられたと考える。本校での実践を軸として、これまでの取り組みを紹介したい。

2 実践の内容・方法等

(1) 少人数・習熟度別学習のこれまでの実践

平成29年度	小学6年生：1学級を基礎、発展の2コースに分けて指導
平成30年度	小学5年生：1学級を2グループに分けて指導 中学1年生：1学級を基礎、発展の2コースに分けて指導
令和2年度	中学2年生：1学級を基礎、発展の2コースに分けて指導
令和4年度	中学3年生：1学級を基礎、発展の2コースに分けて指導 2学級を基礎、発展の2コースに分けて指導
令和5年度	中学3年生：1学級を基礎、発展の2コースに分けて指導 2学級を基礎、発展の2コースに分けて指導

このうち、令和4年度および令和5年度が本校での実践となる。

(2) 本校での学習指導のアウトライン

- ① 各単元の始めにアンケートを実施し、生徒の自己選択によりコースを決定する。
- ② 場面に応じて「補充的な学習」や「発展的な学習」を取り入れ、学力向上を図る。
- ③ 評価については、授業態度、提出物状況、テストの結果（定期テスト、単元テスト）をもとに配点、観点を合わせ、どちらのコースを選択しても不利益が生じないように配慮する。

(3) 学習課題の工夫

身近な事象を数理的に考察できる学習課題を設定し、生徒が学習内容を自分事として主体的に考

えられるよう工夫する。

(4) 言語活動の充実

- ① めあて…生徒に考えさせ、生徒の言葉を引き出しながら本時のねらいにつなげる。
- ② 見通し…既存の知識（技能）と関連づけたり組み合わせたりできる工夫をしながら、個々の生徒のつぶやきを聞き逃さず、生徒の発した言葉を拾いながら考察につなげる。
- ③ 課題解決…発問を吟味したり、生徒の考えを周囲に広めたりすることに心がける。
教師の話は極力減らす。生徒の考えや思いを見取りながら本時のねらいにせまる。
- ④ 発表…子どもの思考を言葉にさせて、論理的に説明できるよう指導。
発表する生徒と聞く生徒をつなぎ、生徒の考えを認め、褒める。→意欲の向上
- ⑤ まとめ…生徒の言葉を利用し、数学的な用語に変換しながらまとめる。

(5) ICT 機器の活用

- ① デジタル教材の活用
動画やアニメーションによる解説により学習内容を確認したり、数値入力や画面タップにより問題場面を図、表、グラフで視覚的に捉えたりすることにより生徒たちの学びを深める。
- ② 情報の共有
タブレット端末の活用により、他者と考えを共有し、多様な考え方を知り、深い学びにつなげる。
- ③ 問題の配付
ロイロノートやスタディサプリの活用により、問題の提示や課題の配付を行う。

(6) 習熟（定着）を図る時間の確保

毎時間の授業において、生徒に自力解決の場面を設定し、学習内容の理解度を自ら確認させ、確かな理解につなげる。理解が不十分な生徒には、個別指導により支援する。

(7) 振り返りシートをもとにした授業づくり

授業の学習内容や、本時の成果、反省などを自分の言葉で記述し、学習を振り返る場面を設定する。また、教師は生徒の記述内容を授業づくりや授業改善につなげる。

3 実践の成果と課題

(1) 学習課題の工夫について

- 生徒の習熟度に応じた学習課題を設定し、生徒の学習意欲や興味関心を高める工夫を行った。
- 課題を解決するための方法や手順を明確にし、生徒が集中して学びに向かえるよう努めた。
- 統合的・発展的に考えたり話し合ったりするための課題設定の工夫をさらに図っていきたい。



(2) 言語活動の充実において

- 発問や問い返しにより生徒の思いや考えを引き出し、生徒の言葉をつなぎながら学びを焦点化し、主体的な授業展開を図った。
- 常に生徒が主体的に学びを展開していく授業を構想し、コーディ



ネット力を養うために、日々の研究を継続していきたい。

(3) ICT 機器の活用について

- 「デジタルコンテンツ」や「GeoGebra」を積極的に活用することで生徒たちの学びを深めることができた。
- タブレット端末を活用した問題の提示や課題の配付により、学習者は時間や場所を選ばず自学自習が可能になり、生徒の個別最適な学びの実現につながった。また、指導者の教材準備にかかる時間や手間も削減した。
- タブレット端末の活用により、学級の枠を超えて情報の共有が容易になった。他者に考えを伝えたり自分の考え方が紹介されたりすることで、学習意欲が高まった。



(4) 習熟（定着）を図る時間の確保について

- 習熟度に応じた学習課題を準備し、知識・技能の習得を図る場面を設定した。
- 授業内に習熟の時間を十分に確保できるよう、時間配分を意識した授業計画を行っていきたい。

(5) 振り返りシートをもとにした授業づくりについて

- 生徒たちの記述をもとに、教師が自分の授業を振り返ることによって、そこから新たな気づき生まれ、授業の進度や指導方法など、今後の授業の方向性が明確になった。



【生徒の記録から】

2学年の復習をしていなかったのがとがめられた。

学びのつながりを意識した授業展開が必要である。既習事項を確認する場面を設定していきたい。

2xをAとかくがけ、こうむすかして $(3x)^2=9x^2$ なのに $6x^2$ と書いていたのを見て気づいた。

類似問題をミニテストに出題し、定着の確認を図っていきたい。

今日は $(x+a)^2=0$ の解き方を学びました。おもしろかったけど友達と指にさしたので分かりました。うん!!

ペアやグループでの学び合いにより課題解決につながった。

今日は、式の値についてやめた。代入する前や後の計算ミスに気づいた。と思った。

式の値を求める問題で計算ミスをする生徒が多く見られた。補充できる学習課題を準備していきたい。

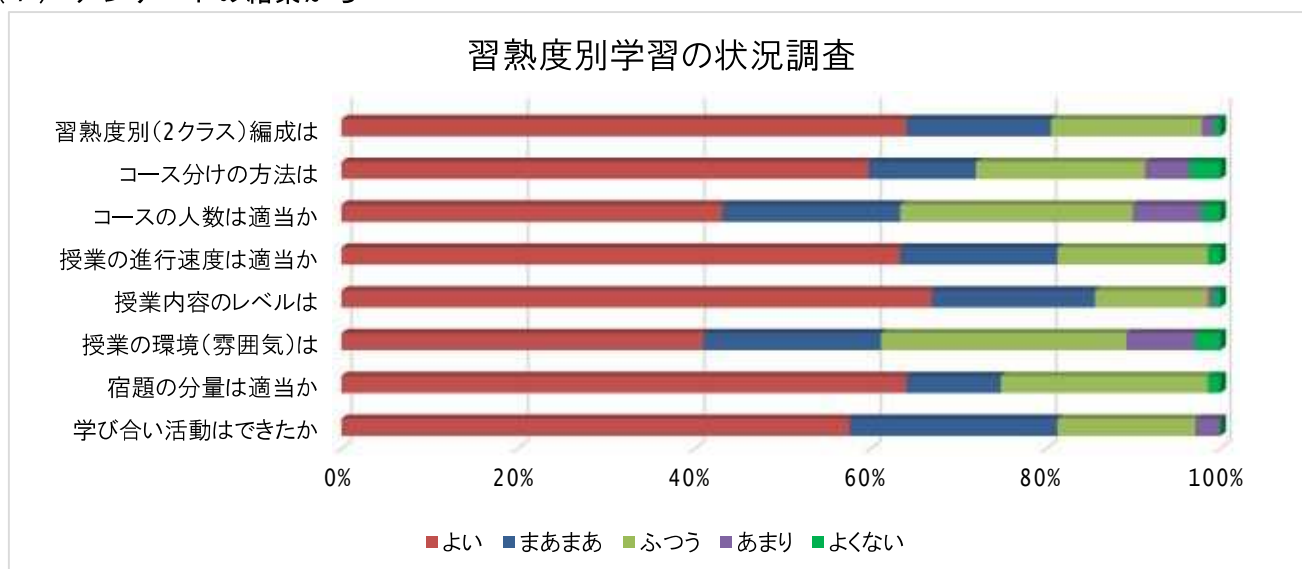
今日は $1/x$ の逆数を極限の図形を使って考えた。みんなが考えに触れられ楽しかった。

身近な事象を数理的に考察することを通して、数学の有用性を実感できるよう学習課題を工夫した。生徒個々の考えを比較したり交流したりする活動を取り入れ「思考力、判断力、表現力等」を高めることができた。

(6) 板書について

- 本時のめあて、見通し、思考過程、学習のまとめなど、1枚の板書を見て学習の流れが分かるよう、構造的な板書づくりを目指すことができた。
- 生徒の中にはその板書をタブレット端末で撮影し、学び直しに活用する姿も見られた。
- 生徒の様子から、板書の大切さを実感した。また、その日の学びを写真に収め、次時以降の授業において活用することも有効であることを発見した。

(7) アンケートの結果から



- 本調査から、習熟度別学習における指導において、多くの生徒が好意的に捉えているといえる。特に「習熟度別編成の実施」「授業の進行速度」「授業内容のレベル」についての評価が高く、上位クラス、下位クラスのいずれにおいても生徒たちは習熟度別学習の意義を理解し、納得しながら学習に取り組むことができたと判断できる。
- 教師の人数が限られておりコースが少ないことや、コース分けの方法が生徒の自己選択により決定しているという現状から「人数のバランス」や「授業の環境（雰囲気）」に課題が見られた。

4 おわりに

現在、習熟度別学習指導を通して、主体的に学習に取り組む態度や学びを人生や社会に生かそうとする能力（学びに向かう力）の育成を目指し実践を重ねているが、これらの実践の内容や効果は習熟度別学習に限ったことではない。

GIGA スクール構想による教育の ICT 化が進み、学びの方法やプロセスが多様化した今、新たな時代の学校システムのあり方が問われ、学校教育の変革への期待も大きい。私たち教師には、それぞれの生徒が自分にふさわしい学習方法を選択し、主体的に学習を進められるような力を身につけ、その態度を育てることが求められる。

中学3年生の生徒たちは、まもなく義務教育を終了し、大きな節目を迎えることとなる。自分自身と向き合い、自分にとっての最適な進路選択が迫られる。

将来的に、生徒たちが社会で有意義な生活を送ることができるよう、学びの中で自己肯定感をもたせ、人間関係を築く力を育てていきたい。そのためには、付け焼き刃的、対症療法的な実践でなく子どもたちの根の力を育む学びについて、日々研鑽を積んでいきたい。

技術・家庭科におけるICTの推進と働き方改革

須賀川市立第二中学校
教諭 小野塚一洋

1 はじめに

国によるGIGAスクール構想の推進により、本市においても、急激なICT化の流れが押し寄せ数年になる。高速インターネット通信やWi-Fi、生徒一人一台端末の配備に伴う学習環境の変化とその活用が求められる中、本来教師の多忙感を解消し、生徒の興味関心を刺激しながら、学びのスピードや豊かさを助けるはずのICTが、逆に重荷になってしまいかねない状況も心配された。本校は県内有数の大規模校であり、日々の授業を中心にしながら、部活動ばかりでなく、様々な活動に活発に取り組む校風がある。授業の中でICTを効果的に活用し、大規模校特有の問題を解決しながら、我々教職員の働き方改革にも繋げたいという思いがあった。

2 実践の内容及び方法とその成果

(1) ネットワーク環境の整備と正しい利用

Wi-Fi環境と生徒一人一台端末が整備され、利用が開始された当初は、複数端末を同時に利用した場合の回線スピードに大きな問題があった。想定していたネットワーク環境には程遠く、トラブルを恐れ、利用を躊躇することも少なくなかった。それでも、市教育委員会やICT支援員のアドバイスをいただきながら、生徒とともにネットワーク利用のマナーやコツを見出していった。トライ&エラーを生徒と共有し、実践の効果を少しずつ実感する中で、市教育委員会の尽力で、回線の強靭化がなされ、今では十分な通信環境のもと学習活動ができています。

(2) 生徒の情報リテラシーの向上

ICTを活用した授業を進めるには、生徒の情報リテラシーの向上が必要不可欠だと考えている。現代の中学生は、生まれたときから情報機器に囲まれて生活してきているとはいえ、生徒によって生活経験は様々で、情報機器の適切な操作や情報モラルが未熟な生徒も少なくない。そこで意識したのは、一人一台端末の積極的な利用である。市の「タブレット端末運用ルール」のもと、技術・家庭科の授業での利用はもちろん、学校生活全般において学習活動に端末の利用を推奨した。生徒が学習の道具として端末を自由に活用できるように環境を整え、経験を積み重ねることを重視した。特に、正しい端末の活用例として、昨年度「ふくしま『未来の教室』授業充実事業」において紹介された「スクールエンジニア検定」の取得を推奨し、評価に加えることで、第2学年において、全体の90%に迫る合格者を輩出した。現在3年生の彼らは、各学習活動において、スムーズな端末の利用ができており、学習の道具の一つとして活用する力が身につけている。

(3) Google workspace の活用

須賀川市では端末としてChromebookを採用し、Google workspaceを利用している。技術・家庭科の授業においても、資料の共有や作品の提出でclassroomを積極的に活用している。学習プリントや資料を印刷せずに共有できたり、動画や画像だけでなくWebサイトも扱えたりするため、指導する側としても準備がしやすく、時短につながっている。学習課題や作業内容によって紙媒体等の資料を選んだりclassroomを選んだり、両方を併用したりすることで、生徒もスムーズに課題を把握し、学習活動に取り組むことができています。

技術・家庭科では、formsを利用してテストを作成し、タブレット端末を使って定期テストを実施して3年になる。作成したテストはclassroomで共有し、生徒はそれぞれ自分の端末で受験する。テストモードで実施するformsはロックがかかり、テスト以外の操作はできなくなるため不正はできない。当初は、ネットワークが原因で、1学年200名以上の生徒が一斉にテストに

アクセスすると遅延が起こるなどの不具合があったが、現在では回線の強化と生徒の操作技術の向上でトラブルなく実施できている。タブレット端末を利用したメリットは大きく、テストの作成は基本的に従来と同じだが、テストの印刷、配布、回収、採点がなくなり、業務が大幅に軽減された。さらに forms により、各答案は自動集計され、グラフで見やすく可視化される。これにより分析が容易で、短時間で各クラスにおいて必要な追指導の内容を絞りこむことができる。生徒数が多く、以前は採点に時間をとられ、負担を感じることもあったが、今はそれがなくなり助かっている。生徒にも好評で、アンケートでもほとんどの生徒が好意的に答えている。



タブレット端末を利用したテストの様子

(4) ロボットコンテストへの挑戦

ICTと同様に、ものづくりの経験を積むことは、生徒にとって大きな意味を持つと考えている。特に、作ったものを使用や操作をしたり、その結果さらに改良を加え、時には作り直したりして試行錯誤する経験は、生徒の創造性や創意工夫、根気強さを育むことに大変効果があると実感している。ロボットコンテストは、自分のアイデアを材料や工具を吟味して形にし、それを操作する中で新しい発見や改善点を見出していく。そこでは、生徒個々の特性を生かしながら、仲間との協力が不可欠である。日々の実践の中で、生徒は互いに成功と失敗を共有し、自信を深め、謙虚さや仲間を大切にす気持ちを培っていく。一連の活動内容は技術・家庭科の集大成とも言え、「見方・考え方」にある「最適化」を目指す活動であると言える。



創造アイデアロボットコンテスト全国大会の様子

学校現場や保護者の理解と応援を得て、毎年創造アイデアロボットコンテスト全国大会に挑戦することができている。困難な課題に取り組む様子は、協同的な学びの「ジャンプ課題」に挑戦しているようであり、時には「橋渡し」が必要で、「探究」がいかに生徒をやる気にさせるか実感しているところである。

3 課題及び今後の取り組みの方向性

(1) 情報モラルの醸成

本校でも生徒のほとんどが自分専用の端末を持ち、生活の多くの時間でネットワークサービスを利用して生活している。SNSの利用も多く、トラブルも絶えない。問題解決の糸口として、生徒の経験値を上げること考えている。ルールの整った適切な環境で、積極的な利用を促し、成功や失敗をみんなで共有する中でこそ、正しい判断力が身につくのではないかとと思われる。情報モラルは、それぞれの立場で、特性を生かしながら働きかけることができる課題であると思う。家庭や地域との連携は必要不可欠だが、教科指導としても、学校全体としても、できることを模索していきたい。

(2) 実践の共有

教科として、あるいは学校全体としてのICT推進にかかわる実践やロボットコンテストへの挑戦について、広く共有していきたいと考えている。そこでもICTの機能を生かし、日々アップデートされる新情報や他の実践にも注目し、学んでいきたいと考えている。

② 放送資料

給食委員会の活動として、給食時間に毎日の給食についての放送を行っている。行事食の由来や意味・栄養に関すること・各教科に関連すること等、給食を通して学ぶことができる事柄について放送することで、食への関心を高めることをねらいとしている。教科書の文言を引用しつつ横断的な視点で作成することで、教科と関連付けられるよう工夫している。

③ 保健講話

健康教育に位置付けられた保健講話の一つとして、1学年では食育講話を実施している。実施後は、1年生が考えたリクエスト献立の提供・個人の推定エネルギー必要量の提示・バイキング給食の実施と、講話内容と関連させて、適量を意識することにつなげている。

④ 教科との連携

- ・ 家庭科との連携として、ふくしまっ子ごはんコンテストへの応募を夏休みの課題とし、栄養バランスを整えた1食の食事を考える機会としている。主食・主菜・副菜を組み合わせるだけでなく、必要量も意識した栄養バランスについて・彩り・旬・郷土食等の視点をまとめた資料を作成し、食に関する指導の重点目標へ向けて取り組み、4年連続で学校賞を受賞することができた。
- ・ 特別支援学級の生徒が学校園で育てたさつまいもを、給食献立に使用して全校生に提供している。

3 成果と課題

本校では、生徒に生きる力を身に付けて欲しいという願いのもと、家庭科教諭、養護教諭、調理員をはじめとした教職員の協力によって日々の食育を行っている。ここ数年、栄養バランスや適量の摂取に課題があったため、「バランスのよい食事を実践する生徒を増やす」ことを食育の重点目標として取り組んでおり、「ふくしまっ子ごはんコンテスト」においては、家庭科と連携することによって、学校全体のものにし、9割前後の生徒が応募するようになった。また、全教職員が情報を共有して食育に取り組んできたことから、年度初めに多かった、給食の残食が減ってきている。

多感な年代で思春期特有の背景もある中、適量の摂取に課題が見られる生徒もおり、個に応じた対応が必要である。継続的・系統的な取組により、自分で考えて食べる力を身に付けさせていきたい。そのために学校給食が果たす役割は大きく、今後も広い視野をもち、教職員と栄養教諭の立場を生かし、関係する教職員との連携を密にして、教育活動全体を通じた食育の充実に努めていきたい。

3年間を見通した学年経営について

西郷村立西郷第一中学校
教諭 宮川 智典

1 はじめに

昨今の社会情勢の中で、学校教育が果たすべき役割は非常に大きくなってきていると感じる。特に義務教育においては将来、民主的な国家を担う知・徳・体バランスのとれた生徒の人間形成に努めなければならない。

我々教職員が教育現場で感じている生徒の学力定着・向上と SNS を含めた情報モラル教育等諸問題の解決に向けて、取り組むべき課題は多岐に渡る。義務教育修了に向けて3年間の見通しをもち、計画的かつ段階的・組織的に指導を行う必要性を強く感じる。

まず、生徒の実態を把握するために、令和5年7月と12月に全学年を対象に「学校生活アンケート」を実施した。結果については以下の通りであった。

令和5年度【全学年】学校生活に関するアンケート・調査集計（一部抜粋）

質問内容	1学期	2学期
学校は過ごしやすいですか。	50.5%	45.2% ↓
学級はまとまり、学活や行事に積極的に参加する人が多いですか。	38.4%	42.8% ↑
約束や決まりを守って生活していますか。	60.1%	56.6% ↓
誰かが困っている時、手助けをしていますか。	53.1%	48.3% ↓
健康には気をつけて規則正しい生活を送っていますか。	51.0%	51.7% ↑
あなたの家庭は過ごしやすいですか。	70.5%	74.5% ↑
先生は、あなたのことをよく分かってくれていると思いますか。	47.8%	43.1% ↓

2学期のアンケート結果から、課題として①過ごしやすい学校作りへの取り組み、②約束や決まりを守ることの大切さの指導、③心を育てる教育、④教師と生徒の信頼関係の構築が挙げられた。

これらを踏まえ、教師が一丸となり改善のための方策を考え取り組むことが必要である。まずは具体的な数値目標を立て、目標達成のために意見を出し合い、「共通理解を図る→実行に移す→結果を考察・評価する→改善すべき点があれば改善する」といったサイクルで実践した。さらに、良い面はほめ、さらに伸ばし、充実した学校生活を送れるよう教師側の支援の必要性も大切である。これらの取組による今後の変容に期待したい。

西郷村教育大綱「自立と共生」を念頭に

本校の教育目標 「生きる力を持つ生徒の育成」

目指す生徒の姿

- ①主体的に学ぶ生徒・・・自己実現に向けて、自ら進んで学ぶ生徒
- ②心豊かな生徒・・・自分を大切に、他の人を思いやる生徒
- ③健康でよく働く生徒・・・体力の向上と健康の維持・増進に努力する生徒

学年目標

中堅学年として自覚をもち、責任感と協調性をもって諸活動に積極的に参加することができる生徒を育てる。

- (1) 中学生としての自覚をもち、責任感と協調性をもって諸活動に積極的に参加することができる生徒を育てる。
- (2) 学習や生活の基本的態度、習慣の形成に努める。
- (3) 個性の深長を図ると共に、思いやりと感謝の心をもつ望ましい集団の形成に努める。

学級目標

- 学力向上のために、一人一人が進んで学習に取り組むクラス
- 一人一人の個性を大切に、思いやりがあるクラス
- どんな時でも笑顔を保ち、元気に過ごすクラス

生徒の気構え 何ごととも

- ・やる気をおこし
- ・本気になって
- ・根気よく

目指す生徒の姿を意識し、全教師が一体となり共通理解のもと、個に応じた支援にあたる。そこで、2学年主任として実践している主な取組を紹介したい。

2 実践の内容及び方法等

(1) 学年集会および学年レクリエーションの定期的な実施

- ① 生徒に進行や司会などの役割を与え、やるべきことに責任を持って主体的に取り組むことができる生徒の育成に努める。
- ② 互いが協力し合い、協調性・団結力・思いやりの心を育む生徒の育成に努める。
- ③ 学年全体の規範意識と所属感、連帯感などの醸成に努める。



【定期的に行われる学年集会】



【学年レクリエーション】

(2) 生徒の情報共有を図るための学年教師による定期的な打合せの実施

- ① 生活面や学習面における生徒個々の情報の共有を図り、重点事項や今後の方向性をまとめる。
- ② 解決すべき課題や改善点をしっかり把握し、足並みをそろえて指導・支援にあたる。
- ③ 養護教諭・スクールカウンセラーとの連携を密にし、適切な対応で生徒との信頼関係を構築する。

(3) 朝の登校指導や休み時間等の巡回

- ① 全生徒に対して積極的にあいさつを行うとともに絶えず笑顔で接し、温かく迎え入れる。また、生徒たちの健康状態なども把握する。
- ② 休み時間等巡回することで、問題行動の早期発見のみならず、何気ない会話や声かけによって安心安全な居場所づくりに努める。

(4) 定期的な学年だよりの発行

- ① 学校生活の様子や次週の行事予定等を保護者に知らせることで家庭との連携に努める。
- ② タイムリーな話題や生徒の活躍の様子を写真や記事にすることで、生徒の自己肯定感の高揚及び賞賛の機会とする。

3 実践の成果

役割を与えられた生徒にはそれぞれに自覚と責任感が生まれ、リーダー育成につながっている。また、学年レクリエーションにおいては、同じクラスでも比較的関わりの少ない生徒同士が話し合ったり、力を合わせたりする姿が見られるなど、仲間としての意識の芽生えや心の育成につながり、まとまりのある学年・学級に成長している。

何らかの事案が発生しても教師間での情報共有や解決に向けての動きが一体化できていることで、素早い対応やスムーズな学年経営が行われている。そのため、大きな問題やトラブルに陥ることなく学年・学級運営がなされている。

教師が身近にいることで生徒に安心感を与えることができ、落ち着いた学校生活を送ることができる。

4 課題及び今後の取組の方向性

意欲的に学校生活を送る生徒が多い中、やりがいや目標を見いだせずに悩みや不安を抱えている生徒も見られる。個性を尊重し、個性の伸長を図るための方法について職員間で試行錯誤を重ねている。

進路を見据え、一人一人の夢や目標の実現のために、集団生活のあり方や心構えについて道徳や学活の時間を有効に活用して心身の成長につなげ、それぞれの希望に近づけていく。

PDCA サイクルを念頭に置いて実行することが大切であることから、各プロセスを大切に、興味・関心を持たせ、諸活動に意欲的に取り組ませる。

卒業する時、「この学校・学年・学級でよかった」と心から思えるよう、個人の自発的な意見や活動が尊重できる雰囲気をつくる。そのためにも適宜アドバイスを送りながら生徒主体の活動ができる組織にしていけるよう、学年主任としてリーダーシップを発揮し、今後もしっかり取り組んでいきたい。



豊かなスポーツライフの実現を目指した資質・能力を育成する保健体育の授業実践と SSRの効果的な運営と支援の在り方

田村市立船引中学校
教諭 國友 靖展

1 はじめに

以下では、筆者が実践してきた2つの事例を紹介する。

1つ目は、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む」指導の実現を目指して実践した保健体育科の授業である。本事例は、第2学年陸上競技（長距離走）で実施した。多くの生徒たちが長距離走に抵抗感を抱く中で、長距離走の新たな魅力や楽しさを実感させたいと考え授業を展開した。

2つ目は、スペシャルサポートルーム（以下：SSR）専任教員として、SSRの効果的な運営と支援の在り方について実践研究してきた事例である。

2 保健体育科の授業実践【2年生 単元 陸上競技（長距離走）】

（1）実践の内容及び方法等

保健体育科（体育分野）の最大の目標は、「生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」を育成することである。本実践では、その基盤となる体育・スポーツを通した論理的思考力・コミュニケーション能力を身に付けさせるために、既習事項等を活用しながら、仲間とともに課題解決に取り組む指導を実践した。

① 既習事項を起点にした授業づくり

既習事項は、前時の学習はもちろんのこと、学年や単元等の枠を超えて、生徒が学習してきた知識や技能、考え方、発見等と言える。一方で、既習事項であるにもかかわらず、生徒の理解が浅いこと、定着していない場合もある。そこで、教師が「生徒の学び」をみとり、生徒の学びを価値付けて既習事項として活用し、それらを起点に論理的思考力を高めていくことにした。

② 「仲間とともに」課題解決する学習課題・場面

効果的な「対話的な学び」を成立させるためには、生徒たちが「他者と対話すること」、「他者と協力して解決すること」、「他者と知識を共有し新しい知識や考え方を創造すること」に必要感を抱かせることが重要である。したがって、1人ではなく、2人以上であるからこそ解決できる学習課題を設定し、それぞれがコミュニケーション能力を発揮して学習に取り組める教材を提示することにした。

（2）研究の実際

① 既習事項を活用した授業構想

単元の前半では、長距離走の「苦しさ」「辛さ」の印象から抵抗感を抱く姿、仲間とチームになって走ることでリラックスして楽しそうに走る生徒の姿が見受けられた。そこで、単元の後半では、目標タイムの近い生徒でチームを構成し、互いにサポートし合いながら走ることで、長距離走の単調さを解消させたいと考えた。さらには、走りの実感（このくらいで走れそう、これでは速い）を踏まえて、自分の目標ペースを設定することで、自己の感覚や体感を言語や数字として表現させ、「自己との対話」を通して、論理的思考力を高めていきたいと考えた。

② 仲間とともに課題解決

3時間目では、「楽に走るためには何が必要なのか」といった問いを投げかけ、「ペース」を維持するために仲間と協働する必然性をもたせることにした。協働を前提とした中で、チームで「上げ下げ走」「一定走」の2つの練習方法にチャレンジし、実感したペースの感覚やペース配分のポ

イントを、仲間と共有できる機会を設定した。2つの集団走を通して、仲間とペースを合わせたり、仲間のアドバイスでペースを調整したりすることで、長距離走や走り方の新たな視点を得ることができていた。

(3) 成果と課題、今後の取組の方向性

○ 仲間との協働を通して、「できる」「わかる」を実感できた生徒が数多く見られた。その一例として、運動が苦手な生徒は、目標タイムを遅めに設定していたが、仲間との話し合いや仲間からのアドバイスを受けて、遅すぎること気づき、設定ペースを改善することができていた。集団走のアドバイスや声掛けを通して、支える側・支えられる側の両方を経験し、「する・みる・支える・知る」の多様なスポーツとの関わり方の中で豊かなスポーツライフを実現していく資質・能力の高まりが見られた。



○ 多くの生徒たちが、前時・本時・次時と各時間の関連を意識して学習することができていた。特に、まとめでは、本時を通して自己の体力の状況を体感的に捉え、それらを生かして次時に向けての学習課題や新たな目標を設定する記述が多く見られた。毎時間の授業をより系統的で、連続的なものにすることができた。



△ 教師がリードする授業展開によって、仲間とともに課題解決に取り組む機会を奪ってしまった。生徒自身に学びを委ね、教師がコーディネーターとしての役割を担うようにしたが、より協働的な学習によって「できる・わかる」を実感させるようにしていきたい。

3 SSR専任教員としての実践

(1) 実践の内容及び方法等

SSR設置校としての役割や機能を最大限に発揮するために、どのような運営と支援が効果的であるのかを追究・検証していきたいと考え、本実践をスタートさせた。

本実践では、SSRの実態や現状を分析・整理するため、SWOT分析の手法を用いて実態把握を行い(図1)、その結果を踏まえて、本実践の方策を構想した(図2)。本校のSSRでは、「多くのSSR利用生徒が、教室復帰や高校進学の実現を目標に前向きに生活しようとしていること」、「目標を達成するまでに、あと一步の生徒もいれば、しばらく時間が必要な生徒もいること」がわかった。SSRの強みや特色を使って機会を活かしたり、生徒個々の課題を理解し、SWOT分析での脅威(Threat)による影響を最小限にしたりするための戦略として、3つの柱で築く「架け橋プログラム」を実践し、SSRの効果的な運営と支援の在り方を検討することにした。

(2) 研究の実際

① 1つ目の柱(土台)「個別のアセスメント」

一人一人の生徒に対する理解を深め、指導・支援の方向性を決めるために、より詳細な「個別のアセスメント」を実施することにした。その際に、対象生徒の不応の状態だけを捉えるのではなく、対象生徒らしさやよさを重視して捉え、下記の2つの柱である「居場所づくり」や「学習支援」

の方策に活用するようにした。

実践事例：個別のアセスメントシートの作成、スクールカウンセラーとの連携によるアセスメント、保護者とアセスメント面談の実施

② 2つ目の柱「居場所づくり」

利用生徒がSSRで安心して生活し、SSRを居場所として認識することで、登校日の増加や登校時間の延長を期待できると考えた。そこで、教室環境の整備をはじめとした「環境づくり」、登校するためのきっかけ作りをはじめとした「登校支援」を行うことにした。

実践事例：環境づくり（リーフレットの作成、教職員向けSSR通信の作成、教室内のレイアウトの変更等） 登校支援（SSR独自の行事を開催等）

③ 3つ目の柱「学習支援」

利用生徒や保護者がSSRに最も期待することの1つに「学習機会の確保・提供」がある。そこで、SWOT分析の結果を踏まえながら、以下の方策で学習支援を行うことにした。

- 学習する習慣がない→学習するためのきっかけをつくる→それぞれの生徒の「これなら頑張れる」部分を分析し、自分の好きな教科や得意な学習に思う存分、挑戦できる機会を確保する。
- 高校進学を希望する生徒たち→学習の基盤づくり（基礎・基本の定着）→「SSR専用の時間割」を作成し、時間割にしたがって各教科の教員がSSRに入り、学習支援を担当する。
- 自分の将来や進路について、目標をもつことができない→今後の生活や人生への3年間のイメージを抱かせる→田村地区の県立高等学校を見学する校外学習の実施。

(3) 成果と課題、今後の取組の方向性

- 架け橋プログラムは、個別のアセスメントを土台にしたことで、残りの柱も最大限の効果をあげた。教室や集団での活動に抵抗があっても、配慮された場であれば登校できる、取り組める生徒は一定数いる。SSRは、そのような生徒の実態を受け止め、一人一人の特性を多面的に把握・分析し、前例にない指導・支援も視野に入れ、その生徒に応じた場や環境を設定していくことが重要であった。
- 本実践では、複数の教職員体制で実施した内容で、大きな効果をあげた。その理由として、複数の教職員で丁寧な指導・支援にあたることができたこと、実施に至るまでチームでより生徒にとって最適な方法を相談し、練り上げることができたからだと考えられる。
- 教室復帰を目の前にした生徒たちが直面する課題として、「友人の目」や「どのように思われているのか気になる」といった不安や恐怖があった。SSRから「教室復帰」に向けた心理面における準備や支援を導入していく必要があった。
- 1年生の当初からSSRを利用している生徒の学習支援は、中学校の学習内容を1から学習するようになる。そのため、個別指導をはじめ、さらに充実した支援体制の整備が必要であった。
- ほとんどの生徒が、「学級に戻りたい」「授業を受けたい」といった希望をもっている。しかし、毎日のSSRの生活の中で、その希望を見失っていく生徒の様子も見受けられた。様々な取組の根底に、「教室復帰に向けて、同じ学校の中で、自分のペースで準備をしている」といった自覚をもたせる指導・支援が必要であった。

4 おわりに

人生100年時代と言われる中で、生徒一人一人が人生の中に体育やスポーツをどのように価値づけることになるのか、その起点に保健体育科の授業がある。したがって、「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」に関しては、生徒の学習評価とともに形成的アセスメントを機能させ、教師として授業改善する姿勢をより一層重視していくことが大切になる。今後も、生徒とともに授業を

構想・展開していくスタンスで、授業実践を積み上げていきたい。

SSRにおいては、すべての生徒に最適な指導・支援、言い換えれば、正解となる指導・支援はないと言ってよいだろう。いかに、個人の実態に応じた、個別最適な指導・支援を模索していくかが重要であった。令和5年3月、文部科学省より「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策『COCOLOプラン』」が通知された。その中においても、SSRに大きな期待が寄せられ、設置の促進が推奨されている。今後も、SSR設置校の立場から、これまでの取組の成果や課題を発信していくとともに、SSRの設置がなされていない学校においても参考になる不登校支援、別室登校の指導・支援の方策について提供できるように研究を進めていきたい。

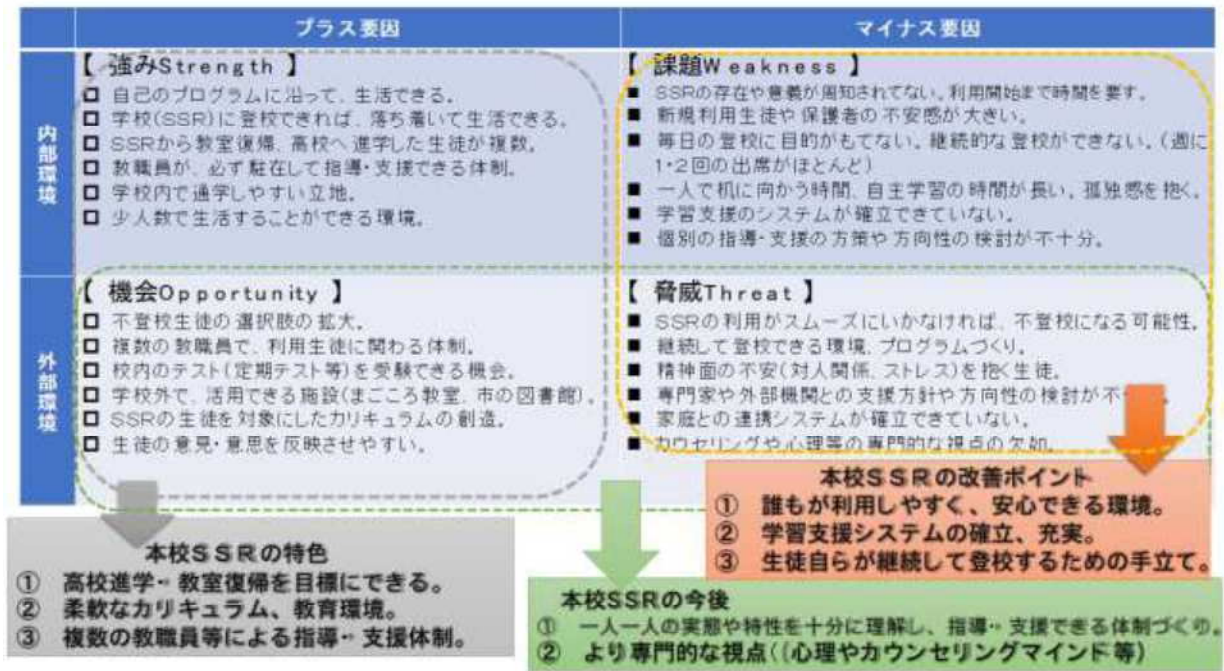


図1 SWOT分析の手法を用いて実態把握



図2 3つの架け橋プログラムのイメージ図

SSH事業の校務運営と探究的な学びを通じた学習指導・部活動指導について

福島県立福島高等学校
教諭 高橋 昌弘

1 はじめに

本校は平成19年度に文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）第Ⅰ期（5年間）の指定を受け、現在は第Ⅳ期目のSSH事業を展開している。全職員で課題研究を中心とした探究活動カリキュラム開発研究を継続して実施しており、特に第Ⅲ期目からは全生徒が課題研究に取り組み、課題発見力や課題解決力を育成するカリキュラムを設定した。探究活動には生徒が主体的に活動し学びを自分事に落とし込む「仕掛け」が重要であるが、同時に教員側の高い指導力も求められるため、備えた指導力を他校でも発揮することで県全体として探究活動が充実するような波及効果も意識して校務運営に取り組んだ。同時に、備えた力を学習や部活動など全ての活動に往還させることが本来の意義と考え、機会を捉えて探究的な学びを生徒指導に生かした。

2 実践の内容及び成果

(1) SSH事業の運営と課題研究の指導について

① SSH事業の目的

「SSH事業は理系生徒だけの制度」と誤解されるが、SSHは学校単位で文部科学省から指定を受けるものであり、本校では全生徒がその対象生徒となる。SSH事業の本来の目的はカリキュラム開発研究であり、1年ごとにPDCAサイクルをまわして効果の分析を行うことが求められる。本校のSSH第Ⅳ期では「地域発のサイエンスリーダーとして高い探究心を持ち、社会課題を解決できる科学技術人材の育成」を研究開発課題に掲げて様々な研究に取り組んでいるが、総合的な探究の時間を学校設定科目「SS探究」として実施している点が一番の特徴であり、教育課程に位置付けたSS探究の授業を中心とし様々な探究活動に取り組んでいる（図1）。



図1 福島高校の探究活動の概要

②SSH事業の運営

①で述べたPDCAサイクルについては、ルーブリックを作成し資質・能力の評価を行っている。年度毎に生徒の資質・能力の変容を分析し、効果が高い事業についてはさらなる高みを目指して、効果が低い事業については改善や精選を行い、カリキュラムマネジメントに繋げている。また、各学年にSSH担当教員を配置し、統括する部署と生徒との連絡調整がうまくいくように工夫している。

③課題研究の指導体制の構築

1年次にはSS探究の授業で「課題発見力養成講座」「ふくしまフィールドワーク」「高大連携講座」「ディベート」等の活動を行い、課題研究を実践していく上で基礎となる力の育成を行っている。2年次には全生徒が課題研究に取り組むが、全職員が指導を行って研究の進捗状況を担当者が管理している。指導担当者の割り当てについても、指導者の教科の特性を生かしたり得意分野を生かしたりと、手法を工夫している。課題研究の指導については今後必ず指導スキルを身に付ける必要があり、本校の「全員で取り組む課題研究」については高く評価され、令和3年度に時事通信社「第36回教育奨励賞特別賞」を受賞した。

④学習・部活動との往還

生徒が獲得した資質・能力については、そのままにせず「探究学習サイクル」を用いて学習活動や部活動等、他の活動へ波及させて総合的に伸ばしていくべきである(図2)。よって、探究学習と学習・部活動との往還を意識して生徒の指導にあたることで、相互補完的にも多くの資質・能力を伸ばしていくことが期待される。

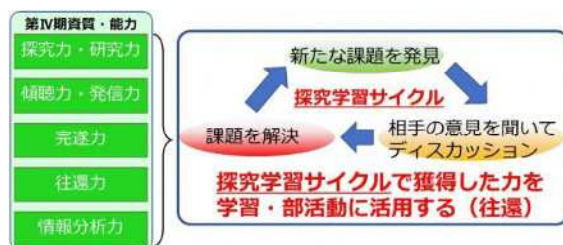


図2 探究学習サイクルのイメージ

④SSH事業の成果波及

本校のSSH事業の成果については毎年報告書にまとめて学校のウェブサイトに掲載している他、毎年2月に行われる校内生徒研究発表会や全国規模の会議等の場を活用し、機会を捉えて積極的に成果の発表を行った。特に校内生徒研究発表会では毎年Zoomを用いて全国の学校にオンライン公開しており、本校の取組を広く普及させている。また、他の学校や大学、民間企業等と連携して「ふくしまサイエンスフェスティバル」を毎年12月に福島市内で開催しており、市内の小学校等にチラシを配付して来場を呼び掛け、1000名を超える来場者に対してサイエンスコミュニケーションを継続的に行っている。また、校内でも生徒・教員だけが見れるウェブサイトを構築した(図3)。これにより、生徒はポートフォリオ的に自らの学びをいつでも振り返ることができ、教員もどの時期に、どの教材を使って、どう指導し、生徒はどう変容したのかを確認することができ、校内でのスキルアップも意識した取組を行った。



図3 校内のウェブサイト

⑤国際交流

本校はこれまで台湾、中国、韓国、タイ、フィリピン、アメリカ、フランス、イギリス等の高校生と国際交流を行ってきたが、コロナ禍で海外渡航が難しくなり、オンラインの取組が増えた。今後も継続的に交流していくために、タイの高校と姉妹校協定を締結し、毎年対面やオンラインでの交流を行っている。姉妹校とは生徒同士の交流だけではなく、それぞれの教育プログラムの特徴を議論するような教員同士の交流も行っている。

昨年度からは発展的に国際共同研究の取組も実施され、今後も生徒達を国際的な学びの場で活躍させるよう、様々なプログラムを考案して取り組んでいる。

(2) 学習指導について

① ICTの活用

タブレット端末やネットワーク環境が整備されICT活用の機会が増えているが、本校では教員の講義動画等をYouTubeに限定公開しサイトにまとめて生徒に提示していたため、コロナ禍でも問題なく教育活動を展開することができた。現在は生徒が一人一台端末を保有しているため、課題の提出や授業アンケート等もクラウド上でやっているが、ICT活用が悪い影響を与える場面もある。私は、化学の授業では授業スピードと生徒の理解向上のため、パワーポイントでスライドを投影して授業を進めているが、ICTをあえて活用しない場面もたくさん設定している。例えば、「分子模型」を生徒に配付し実際の分子モデルを生徒自身の手で作成させるが、これを動画で済ませてしまうと生徒が分子構造を頭の中で回転させて立体的に捉えることが難しくなる(図4)。ICTの活用自体が目的化してしまっている学校も多いが、教員の活用の仕方では生徒の変容に影響が出るため、何が有効なのかを常に考えて授業を実践してきた。また、生徒からの質問はタブレット上で添削した動画を作成し、全生徒に共有することでボトムアップを意識して指導を行った。



図4 ICTの効果的な活用シーン

② 総合型選抜への応用

大学入試が知識偏重型から思考力重視型へと転換し、学校推薦型選抜や総合型選抜への定員増加の傾向が顕著となる中、本校では全員が課題研究や各種探究活動を実施していたため、比較的スムーズに対策を行うことができた。中でも探究活動で培った資質・能力については志願理由書作成や面接練習にも大いに活用でき、受験生の指導にもこのような観点を重視して指導を行った。大学での学びの方向性や卒業後のキャリアプランに至るまで、自分の言葉で論理の矛盾なくしっかりと語れるまで考えさせることにより、相乗的に生徒のモチベーションも向上した。特筆すべきは一般選抜よりも難しいといわれる東京大学の学校推薦型選抜に、本校からこれまで合格者を6名輩出していることである。合格した6名は全てスーパーサイエンス部の生徒であり、出願指導や面接指導を行う際にも探究活動で身に付けた課題発見力や論理的思考力等の力を確実に生かすことができた。探究活動との学習活動との往還関係については今後も引き続き研究を深めていく。

(3) 部活動指導について

① スーパーサイエンス部

本校では理科系の部活動としてスーパーサイエンス部(以下、SS部)を設置し、理数系のハイレベルな研究活動を行っている。令和元年度についてはSS部の生徒は物理・化学・生物・地学の全ての国際科学オリンピック予選大会で二次選考への出場を果たしており、化学では金賞を受賞した。ま

た、令和2年度については日本代表としてISEFに出場し文部科学大臣特別賞を受賞するなど、生徒達は世界でも活躍している。SS部の活動における研究指導について一番気を付けていることは、教員の研究にならないよう「付かず離れず」に指導を行うことである。基本的に全て生徒に考えさせており、教員はわずかなアドバイスをを行うだけである。場合によっては大学教授や研究所の研究者等と生徒を繋ぐことも必要となり、そういった場合は依頼文の送付などの事務手続きは教員が行うこともあるが、基本的には研究活動は本人が行うものであり、主体的に取り組ませている。また、高文連主催の大会はもちろんのこと、研究テーマに沿った各種学会への発表を心掛け、日本金属学会では日本金属学会会長賞、電気学会でも最優秀賞を受賞することができ、一定の評価をいただいた。

②管弦楽部

今年度は11月に日本学校合奏コンクールの全国大会に出場することができたが、吹奏楽とは異なり管弦楽部が出場できる大会は少なく、この全国大会出場を一つの目標に掲げて取り組んでいる。①のSS部の活動と同様に、生徒主体の活動として「付かず離れず」に指導を行うことに尽きるが、音楽の指導についてはSTEAM教育を意識して取り組んでいる。今年度はチャイコフスキーの曲を取り扱ったが、曲中に登場するフレーズの原曲となる民謡や歴史的背景を提示し、どのような意図で作曲されたのかを生徒と共に学んだ。また、演奏姿勢やマウスピースの角度など身体的な箇所については生物学的・体育的アプローチを行い、和音等の構成については物理学的視点から振動数の話へと展開し、総合的な学びを心掛けた。こういった発問を通じて生徒達は自ら考えるように変容し、通常の音楽の部活動とは異なる視点での学びを部活動に導入することができ、全国大会へ出場することができた。

3 今後の取組の方向性

本資料で述べた資質・能力に加えて、生徒には常に「多様性」を尊重し「異文化」を理解しようとするマインドを持つように指導してきた。この2つのキーワードは今後の社会で文系理系問わず必要になると確信しており、今後も探究的な学び、STEAM教育を通じて育成していく必要がある。生徒自身が国際社会と接点を持つにあたり、相互の主張がねじれの位置関係にならないよう、多次元の価値観で理解しようとする姿勢が必要である。引き続き、自ら考え行動できる生徒の育成に努めていく。

プレーヤーの学びに対する主体的な取り組みを支援する指導について

福島県立福島南高等学校
教諭 渡邊 拓也

1 はじめに

本校は昭和62年の創立以来、国際化の進展と情報化社会の高度化に対応できる広い視野に立ち、豊かな心を持つ人間の育成を目指して、文理科・国際文化科・情報会計科の3つの専門学科の特色を生かした教育活動を展開し、生徒の進路実現に努めている。本年度で創立37年を迎え、各学年文理科2クラス、国際文化科1クラス、情報会計科1クラス、全校生約480名の学校である。生徒の進路先は大学・短大が約70%、専門学校約15%、公務員を含む就職が約15%と多岐にわたっている。そのため、生徒は進路実現のために5教科を中心とした平常及び長期休業中の課外、各種資格取得のために朝及び放課後の課外等に励んでいる。

また、午後になるとふくしま新世高校（定時制）の生徒が登校し、同じ校舎で多くの生徒が元気に学習活動を送っている。一方で、福島南高校の部活動とふくしま新世高校の授業（体育や総探）が重なり、体育館の使用に制限があり、限られた時間内に施設をどう有効に活用するかが、学校・各部・各顧問の課題となっている。

そこで、私たち男子バスケットボール部は「チーム理念」のもと、選手が何事にも主体的に取り組み、制限された時間や場所などを有効利用し活動している。今回はその取り組みの一部を紹介したい。

福島南高等学校 男子バスケットボール部

【チーム理念】

- ①誰からも愛され、多くの方々に応援していただけるチームを目指す。
- ②「文武両道」を実現し、学校の誇りとなるチームを目指す。
- ③地域の小中高校生の模範となるようなプレーを展開し、常に最高の努力・最善を尽くす選手になることを心がける。

※具体的な行動

- ①挨拶の徹底・進んで仕事をする。（気が利く）
- ②授業を大切にす。試験のために最高の準備をする。
- ③基礎・基本（ファンダメンタル）を大切にす。チームメイト・審判・バスケット関係者をリスペクトする。

2 実践の内容及び方法等

「プレーヤーの学びに対する主体的な取り組みを支援するコーチング」を実践するために

(1) 練習前の準備・必要なこと

「学び」について考える。学びには、【適切な環境】【適切な課題】【適切な支援】が必要である。（環境＝信頼関係、課題＝目標設定、支援＝アドバイス）特にチームを指揮するうえで、コーチは選手との信頼関係の構築が不可欠だ。そのために私たちは「1on1ミーティング」を行っている。これは練習の前後、昼休み時間等に行う定期的な面談である。私は1on1ミーティングを通してプレーヤーが抱えている学校生活・プレーの悩みや将来的なビジョン等を理解し、対話を繰り返すことで問題解決や気づきによるプレーヤーの成長をサポートするように努めている。

また、学びには以下の原則がある。

【学びの三原則】

- ①インプットよりアウトプット
- ②成功体験より失敗体験
- ③予習より復習



この原則を踏まえ、練習ではまず自分が実際にプレーをしその動きを見せて、しっかりと説明をし理解させたらどんどんプレーをさせている。そこでナイスプレーには誉め言葉をかけて、充実感を与え自己肯定感を高めさせる。バッドプレーには、よりよくなるためにNextを考えて成功への働きかけ（声掛け）をする。このように、選手が主体的に何度も何度も繰り返し練習することができるよう、計画的にメニューを立てて練習に臨んでいる。

(2) 練習での取り組み

選手が主体的に学びに取り組むためには、「ゴール設定」が不可欠である。ゴールを設定するために心がけていることは以下のとおりである。

- ①具体的（推定ができる・期限が明確・達成のための行動が明確）
- ②チャレンジ（難しすぎない・簡単すぎない）
- ③ワクワク感（モチベーションが湧く・達成後のイメージの想像）
- ④信念（コーチのこだわり、思い）

私たちは練習前のミーティングで、本日の練習のゴール（目標）をスタッフ・選手間で確認し、ホワイトボードに書き込んでいる。また、ゴール達成のためにどのような準備が必要か、選手に問い、それをすべて「ポイント」としてボードに記している。選手自らが考えたプレーポイントがうまくできたかどうか、4つの手法を使い選手を支援し練習を反復する。

TELL（伝える）→SELL（提案する）→ASK（質問する）→DELEGATE（委ねる）



(3) 練習後に心がけていること

練習直後のミーティングでは、その日の目標達成について確認し、翌日の練習目標を設定する。（平日は帰宅が遅くなるので長く話をしない。個人的なプレーの話は練習中にする。）

(4) チームの目標を立てる

チームの目標は、1点でも相手チームより多く得点し勝利することである。そして、福島県でチャンピオンになることである。毎年、メンバーが替わる高校生のチームではチームの現状分析（プロファイリング）によって、強みと弱みを理解し、チーム目標を設定していく。目標には、

- ① 成果目標（社会的な比較：〇〇に勝つ）
- ② 行動目標（パフォーマンス目標：3Pシュート70%以上）
- ③ 状態目標（毎日100本シュートを打つ）

があり、①「福島県でチャンピオンなる」という成果目標のもと、各選手が②③の目標を各自の練習ノートに記録し、定期的にミーティングを実施して目標の達成とその進捗状況の確認を行う。

3 実践の成果

(1) 選手間のコミュニケーションの増加

上級生を中心にプレー間にコミュニケーションを取る選手が増えた。チームまたは各選手がやるべきことが明確になり、自覚・責任をもってプレーするようになった。

(2) 各選手が試合や練習中の映像を利用しプレーを分析

選手が練習中や練習後にビデオカメラやiPadによってプレーを確認し、次への課題を見つけるよう

になった。

(3) リーダーシップ・自覚と責任

部活動ばかりでなく HR（授業）でも目標を立て、行動できるようになると自然に学校生活においてもリーダーシップが取れるようになった。また主体的に行動することによって、自覚と責任が生まれ少しずつではあるが学習成績も向上してきている。

(4) 全国大会出場

2022年インターハイ（2大会ぶり4回目）、ウィンターカップ（3年ぶり4回目）

4 課題及び今後の取り組み

現在の取り組みにおける課題は、学校業務多忙による部活動指導時間の制限（減少）である。特に1on1ミーティングの時間確保や練習前ミーティングの実施が難しくなっている。（練習前のミーティングはキャプテンが代行）現在部員が20数名なので、1on1ミーティングや練習ノートを確認することは可能であるが、部員が多くなれば物理的に実施するのが困難になってくると思われる。「プレイヤーの学びに対する主体的な取り組みを支援する指導」を実践するために、放課後はできる限り練習に参加し、部活動指導を実施したい。そのためにチームとして取り組むべきことは、スタッフ（顧問、マネージャー）間の業務分担や外部指導者（トレーニングコーチ、トレーナー）の導入などである。また、バスケットボール部の活動における保護者の理解も必要だと考えている。（現在保護者会はとても協力的で感謝している。）



ウィンターカップ北越（新潟）戦
ハドルを組む南高



ウィンターカップ 福岡大大濠高校戦

高校生ものづくりコンテスト及び技能競技大会電気工事部門への取組み

福島県立平工業高等学校
実習教諭 大塚 秋典

1 高校生ものづくりコンテスト及び技能競技大会とは

高校生ものづくりコンテスト電気工事部門や若年者ものづくり競技大会及び電気工事技能競技大会によって出題される電気工事施工の配線図（課題図）に基づいて、制限時間内に正確に速く、且つ綺麗に、約2m四方の垂直に立てられた作業板に様々な電気器具・ケーブル・金属管・PF管などを取り付けて、与えられた条件どおりに動作される配線をしていく競技である。採点方法は、減点方式である。

2 実践の内容

(1) 作業板の製作

作業板（図1）を製作して、練習をしていたが、材料室の一角を使用できるようになったのでそこに三台の作業板（図2）を壁に設置し製作をした。



図1 作業板



図2 三台の作業板

(2) 作業台・治具・補助棒の製作

生徒がスムーズに作業を進められるように作業台（図3・図4）や治具（図5）ステッplerやサドルを止める位置だし、治具（図6）ケーブルや金属管、PF管の曲げ半径をかたどる道具、金属管を曲げるための補助棒（図7）力のない生徒には長く調整し製作した。



図3 作業台



図4 作業台



図5 治具



図6 曲げ半径治具



図7 補助棒

(3) 指導内容

練習時間は放課後の3時間を使用し、生徒は積極的に一生懸命練習に取り組んだ。

毎日、作業練習を行っているが作業板の値段が高いので、墨出し用チョークラインの色を白・黒・ピンクに変えて同じ板を再利用するなどして、SDGsにも配慮して経費削減に努めた。作業練習では、各作業の時間を計測して遅いところや苦手なところを何度も繰り返し練習をする事によって技術を磨いた。空き時間には、作業板から器具等を外して置き、すぐに作業に入れるようにした。作業効率を考えて、作業手順を入れ替えた練習を行い効率の良い適切な作業を指導した。

3 各大会の実績

(1) 福島県高校生ものづくりコンテスト電気工事部門

- ① 2018 優勝 会場：福島県立郡山北工業高等学校 H30. 10. 26
- ② 2020 優勝 会場：福島県立郡山北工業高等学校 R2. 10. 30
- ③ 2021 優勝 会場：福島県立郡山北工業高等学校 R3. 10. 15
- ④ 2022 優勝 会場：福島県立郡山北工業高等学校 R4. 10. 14
- ⑤ 2023 優勝 会場：福島県立郡山北工業高等学校 R5. 10. 13

福島県大会は、課題図（図8）から複線図（図9）に書き直し必要なケーブル線の色や金属管・PF管の長さなどを選定する。様々な器具の施工方法やケーブル曲げ方・金属管の曲げ方など何度も練習させた。また各パイロットランプの点滅は4通りあり、渡り線を足したり線の色が変わったりするので繰り返し練習した。



図8 課題図

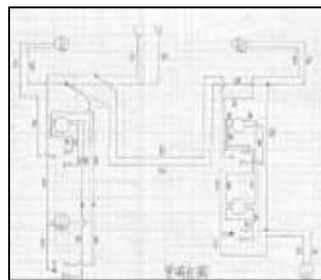


図9 複線図



大会風景

(2) 高校生ものづくりコンテスト東北大会 電気工事部門

- ① 2016【青森大会】3位 会場：青森職業開発促進センター H28. 7. 29
- ② 2019【秋田大会】5位 会場：秋田県立秋田工業高等学校 R1. 7. 29
- ③ 2021【福島大会】優勝 会場：福島県立郡山北工業高等学校 R3. 8. 6
- ④ 2022【青森大会】2位 会場：青森県立青森工業高等学校 R4. 7. 29
- ⑤ 2023【岩手大会】7位 会場：岩手県立黒沢尻工業高等学校 R5. 7. 16

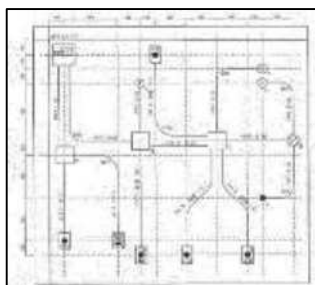


図10 R1. 課題図

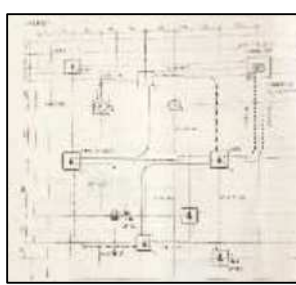


図11 R3. 課題図

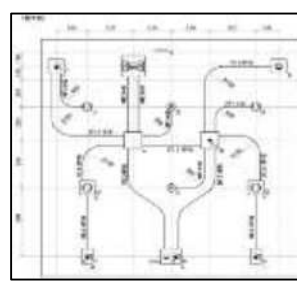


図12 R4. 課題図

東北大会での競技課題は、全国大会に準ずる課題図（図10・図11・図12）となる。5月中旬より、単線図を複線図に直し、施工に必要な線の長さや色別、ボックス内の接続箇所を個数を確認した。県大会と違い作業板に器具や電線管、ボックスやサドルの取り付け位置を割り出すための治具を使用してよいのでその治具を製作をした。金属管やPF管の必要な長さを算出し、県大会での作業工程に入

っていない金属管の切断方法や切断後のバリ取り方法の指導をした。



大会風景

(3) 第21回高校生ものづくりコンテスト全国大会 電気工事部門

① 敢闘賞 会場：神奈川県立東部総合職業技術校 R3. 11. 13

東北大会後、選手と話し合いながらステッplerやサドルの位置を割り出すための治具などを製作した。大会に向けて配線用遮断器の2次側の2本のVVFケーブルの間隔や曲げ半径治具を使用して線を引き、その線にそって曲げる方法に変えた。当日課題変更が3箇所あるので、Sの表示のついた3路スイッチや4路スイッチの位置、露出の器具の位置を変え何度も練習を行った。それぞれの位置が変わると回路も変わるので大変だったと思うが一生懸命練習に取り組んでくれた。



大会風景

(4) 若年者ものづくり競技大会 全国大会 電気工事職種

① 第17回 銀賞 会場：広島県 広島市中小企業会館 R4. 7. 28

② 第18回 敢闘賞 会場：静岡県 ツインメッセ静岡 R5. 8. 2

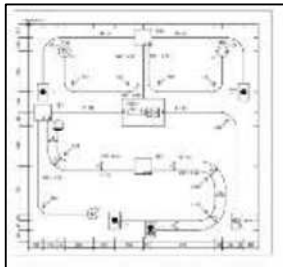


図13 第17回課題図と分電盤内

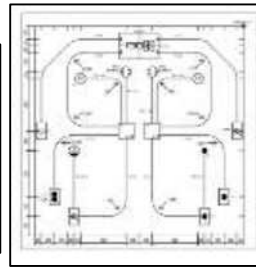
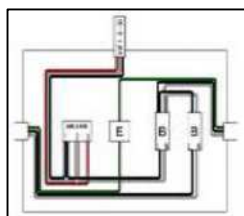
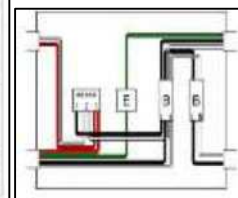


図14 第18回課題図と分電盤内



大会1か月前に競技課題(図13・図14)の発表がされるため練習時間が短く、上手に出来るか作業時間内に完成するのか不安と焦りがあった。単線図を複線図に書き直し確認をして、今ある材料や器具を使用して、競技課題を完成することにした。第17回の課題はPF管とWF1. 6-3Cが通るR曲げやスイッチボックスの上側にケーブルが通る場所、第18



大会風景

回は右上の金属の曲げが難しかった。第17回や第18回も分電盤内のIV線をインシュロックで固

定し綺麗に見せることや配線用遮断器の1次側にIV2.0mmを2本差し込むことに苦戦をした。色々な変更箇所を想定して練習を行い、また通し練習を土・日も使用して繰り返し行った。

(5) 第4回電気工事技能競技全国大会 高校生の部

① 金賞・文部科学大臣賞 会場：神奈川県横浜市 横浜アリーナ R4.12.1

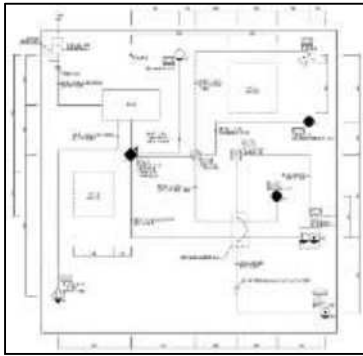


図15 課題図



図16 通電措置



図17 分電盤



図18 立体交差



図19 合成樹脂線び工事



大会風景

今回の大会は、作業板の位置が地面から600mmの高さにあるので作業板の高さを上げて練習することから始めた。課題図(図15)と作業指示書に従って作業をする。1次側電源は電気が流れているので、作業開始後、通電禁止措置(図16)をする。分電盤も木板だったが実物(図17)を使用した。何度か分岐回路を間違えたこともあったが繰り返し確認をした。金属管も曲げはともかく、露出の3路スイッチのケーブルとVE管の上部を立体交差(図18)するため試行錯誤して、きれいな形状に何度も曲げ練習を繰り返した。今までのものづくり大会では使用しない合成樹脂線び工事作業(図19)も行った。他にも今まで携わってないことがたくさんあり、苦戦をしたが、時間を計測し通し作業を何度も行い大会に臨むことができた。その結果、高校生の部で全国1位となる金賞及び文部科学大臣賞を受賞することができた。

4 今後の取り組み

東北大会や全国大会では、他の学校選手の技術の高さに驚かされる。そのような大会で見たことや良いところなどを記録し生徒に還元をする。また、先輩が自ら学んで得た技術や知識を後輩へ伝承・伝達指導をすることが理想であり、その時間の確保が難しいところがあるが今後、この取り組みを出来るように工夫をしていきたい。

地域で共に学び共に生きる教育を目指して

いわき支援学校くぼた校
教諭 児玉光彦

1 実践の内容及び方法

(1) はじめに

本校は、平成27年4月、勿来高等学校の空き教室を活用し、いわき支援学校の分校として開校した。くぼた校といわき市の中心地にある本校とは、30kmほど離れており、いわき市内の特別支援教育の充実を図ること、共生社会の形成に向けた福島県特別支援教育の基本理念「地域で共に学び共に生きる教育」を推進することを目的として設置された。高等学校内に特別支援学校の分校が設置されることは県内で初めてのことであり、開校当初は、それぞれの校種が違う学校がうまく共存できるか、生徒同士のトラブルが起きないか、特別教室の使用はできるのか、など様々な不安がある中で、両校の教師が連絡を取り合いながら、教育課程の編成、時間割の工夫、そして特色ある学校づくりに取り組んできた。

(2) 交流及び共同学習の推進の工夫

- ・同じ校舎で生活することのメリットを生かして、学校生活の中で接点や関わりを大切にすること
- ・互いの学校の教育課程の実現を大切にすること
- ・両校の生徒、教師が無理せずにとできるところから進めること

2 実践の成果

(1) 学校生活の中で接点や関わりを大切にすること

① 学校行事

- ・対面式は学校同士が同じ校舎で学ぶためのスタートであり、静粛な雰囲気の中で行われ、くぼた校の生徒にとっても儀式的行事はきちんとしなければと自然と感じる活動になっている。
- ・総合消防防災訓練は勿来学校の行事や計画に合わせて合同で実施している。くぼた校生にとっては高校生を行動を見本とする実践的な学習の場となっている。

② 生徒会活動

- ・朝のあいさつ運動は、県内一斉で高等学校の生徒会が実施している活動である。くぼた校の生徒にとってあいさつの習慣は長所でもあり、勿来高校も力を入れている活動でもある。同じ昇降口を利用し、登下校の時刻も一緒に、共に学べる活動になっている。

③ 職業科の連携

- ・くぼた校が作業で織ったさをり織りの反物の製品化を勿来高校の家庭クラブにお願いをした。勿来高校生がくぼた校の職業（作業）を知る機会になり、くぼた校にとっても、製品作りの流れや勿来高校とのつながりを意識できる取組となっている。また出来上がった製品は地域の商業施設で販売会を行っているが、その取組を知った地域のNPO法人から両校にふさわしいロゴマークを制作したいと依頼があり、勿来高校、くぼた校の心が通い合うような願いを込めて「nacoro」と名付けて、製品に付けて販売している。家庭クラブとの連携から地域との連携にも発展し、両校で誇りをもって進めている活動になっている。



(2) 互いの学校の教育課程の実現を大切にすること
両校をつなぐ「共生プログラム」の実践

両校の交流を深めることを主な目的として計画された学習として「共生プログラム」がある。勿来高校ではくぼた校開校前から併設を意識し、勿来高校生徒たちがくぼた校の生徒たちをスムーズに受け入れることを目的として授業を行っていた。開校後はくぼた校も一緒に企画、立案に参加して取り組んでいる。

勿来高校生を対象にして、①くぼた校について知ろう。②障がいの理解と関わり方。③くぼた校の生徒と一緒に活動しよう。を主な内容とし、①②はくぼた校の教師が授業を行っている。②障がいの理解と関わり方については、不自由さの模擬体験を通して、相手の立場を理解し、併せて自分自身の行動や感じ方について気付くことで、日常的な生活にも置き換えて人との関わりや行動の仕方を振り返られるように取り組んだ。③くぼた校の生徒と一緒に活動しよう。では、「製作」「ビルクリーニング」「工芸」の3つの作業班の活動を取り入れ、人数のバランスにも考慮しながら交流活動を実施している。各作業班では、勿来高校生徒に教師が説明するのではなく、すべての場面でくぼた校生徒が勿来高校生徒に教えている。相手に教えたり伝えたりすることは、場面や状況に応じてのコミュニケーション面に課題が多いくぼた校生徒にとっても有意義な学習活動となっている。

実施に向けては、両校の教師が互いの学校における指導目的や生徒の実態について共有し合い、授業に臨んでいる。事前のくぼた校生徒の活動に対してのアンケートでは、期待と不安の両方の意見があったが、活動を通して勿来高校生徒の学習に対する取り組み方への気付きが見られる。勿来高校の生徒にとっては、くぼた校の学習について知ってもらっただけでなく、「共に学び共に生きる」についての理解につながる一歩となっている。その成果は勿来高校生の振り返りにアンケートからも読み取ることができる。共生プログラムは両校の生徒にとって大きなメリットがあり、重要な取組の一つとして、両校の教育課程に位置付けて進めている。

令和5年度 共生プログラム

●日程
第1回：4月13日(水)5校時 第2回：6月9日(金)5・6校時
第3回：12月上旬～中旬迄、4校時(くぼた校の休校実施日)

●対象
1年生徒数42名(1組：21名 2組：21名)

●内容について

日 時	内 容	講 師	備 考
4月13日(水) 5校時 (1組1組) 11:00～11:15	「くぼた校について知ろう」 ・くぼた校の生徒が活躍する授業等を紹介することで、くぼた校生徒のよいところを気付かせる。 ・くぼた校の先生から、学校生活についての説明を聞く。その際、授業紹介だけでなく、特別支援学校で行われている授業の経験や感想などについてお話ししていただき、「普通学校へ進みたい」ではない、質問の範囲についても回答していただく。	くぼた校 教員2名	第二体育館 1学年担任
6月9日(金) 5校時 5校時 11:15～11:15	「障がいの理解と関わり方」 ・障がいの模擬体験 ・障がいのあることとはどのような悩みがあるか、どのような感じがあるからこういう風に考えられるかという気持ちも共有。 ・障がいがあることへの理解を深め、コミュニケーションの場を創出する。	くぼた校 くぼた校教員2名	第二体育館 1学年担任 特別担任
12月上旬～中旬 3校時 (2組) 4校時 (1組)	「くぼた校の生徒と一緒に活動しよう」 ・くぼた校の生徒や先生方と一緒に活動(どんぐり・コンゴ・製作・工芸)をすることで、お互いの理解や交流を深める。また、くぼた校の生徒が「障がい」にまるとして行っている体験学習を体験することで、「働く」ということ、「仕事をする」とはどういうことが体験し、自分自身のあり方を考え直すきっかけとする。また、くぼた校の生徒の経験や感想を共有することで、活動への理解を深める。 ※活動のないクラスは教室でのひき取りや準備を行う。	くぼた校 教員3名	校内各課 くぼた校 3学年担任 特別担任 1学年担任



「共生プログラム」全体を通した振り返り～抜粋～

○「くぼた校の生徒と一緒に活動しよう」の振り返り。

この授業で印象に残ったことを書いてください。

- ・いつもの清掃時間と変わらないのに疲れました。思ったより大変なことを毎週くぼた校の生徒の人たちがしているからすごいと思った。
- ・くぼた校の人と協力してエコバッグを作ることができた。手先の器用さにおどろいた。同じものを一緒に作ることにやりがいを感じた。
- ・くぼた校の人の教え方が分かりやすい。とても疲れる作業だった。
- ・今から卒業後の働くための勉強をしていることにおどろいた。
- ・毛糸でたわしを作った。以外とむずかしかった。それをすいすいやっているくぼた生徒はすごいと思った。

○今日の作業を通して、これからの社会（＝学校、地域等）の中で生活していく上で大切にしなければいけないことは何だと感じますか。

- ・障がいがあるからといって、特別扱いをしないで、友達と同じように話をしようと思った。
- ・人の悪い所ばかりではなく、良い所を見る。その人の個性を大切にする。何事にもみんな協力することが大切だと思った。
- ・障がい者だからと差別せず、仲よくいろいろなことに取り組んでいければいいなと思った。将来的に役に立つことを学べたのでよかった。
- ・いろいろな人たちのことを分かった自分もその支えになれるように頑張っていきたい。

(3) 両校の生徒、教員が無理せずに行きとるところから進めること

数年前から勿来高校体育祭の学級対抗リレー競技へくぼた校も参加している。コロナ過では、両校で実施してきた交流及び共同学習も自粛を余儀なくされ、勿来高校でくぼた校と一緒にできることはないかと、考えてのことだった。きっかけはくぼた校の体育の授業を見学していた勿来高校の体育科の教師の、「くぼた校生は走るのが速い。競わせたなら良い結果になるかも。」その一言が発端である。実際に大会はくぼた校が第2位となり大いに盛り上がりを見せた。また、3年に一度実施する勿来高校文化祭も、令和5年度はくぼた校と合同で実施された。



両校の生徒会が中心となり、両校生徒による校歌斉唱、ステージ発表、共同美術作品など内容は多岐にわたったが、同じ校舎で生活することのメリットを最大限に生かして、両校の生徒、教師が無理なく、授業、朝や放課後の時間を利用して一緒に進めることができた。

3 課題及び今後の取組の方向性

くぼた校と勿来高校の併設は、両校の生徒にとって新たな学びにつながっている。くぼた校の生徒は勿来高校の生徒から生活態度、規律、同世代のコミュニケーション等、特別支援学校内だけでは学べないことを登下校や休み時間、授業、行事など学校生活の自然の流れの中で学ぶことができる。勿来高校生徒の学びについては、共生プログラム後の感想の中で見ることができる。教師同士にとっては、様々な学習場面や生活場面で調整と再確認が必要となってくるが、そのこと自体

が新たな取組となり、教師同士の共通理解や接点の気づき、ひいては生徒同士の学びにつながっていく。

前にも述べたが、共生プログラムは開校当初の様々な不安がある中で、くぼた校の受け入れに向けた取組みであった。取り組んでいくうちに共生プログラムで得られる視点や考え方は、高校生自身が自分たちの生活の中で生かせるものではないかとの気付きがある。障がいがある、ないという理解の仕方もあるが、自分たちの周りにも、学級の中にもいろいろな人がいて、どんな人ともより良い関わりをして、つながっていくためには違いに対する寛容さや伝え合う力が大切ではないかと、ねらいが広がっていった。そのテーマが共生という視点であり、両校のつながりのテーマとなっている。

今後も多くの接点やつながりを大切にし、両校にとって、充実した学びになるように、さらには地域で共に学び共に生きるための一歩となるように取り組んでいきたい。



個別支援に向けた校内体制づくりについて

福島県立いわき翠の杜高等学校
養護教諭 渡辺 瑞希

1 実践の内容及び方法

(1) 学び直し学習会「みどりベース」の創設

不登校など様々な理由から就学機会に恵まれなかった生徒や、学習面でのつまずきのある生徒に対して、学び直しの機会の確保や長期休業中の課題の支援を行う。

- ① 長期休業中の支援：日程を生徒へ周知し、参加した生徒がその日の学習内容を決め、それぞれの生徒の学習支援を行う。
- ② 考査期間中の支援：考査時間が午後からのため、午前に学習会を行い、考査内容の学習支援を行う。学習支援員を中心に、個別支援教育コーディネーター、特別支援教育コーディネーター、各教科担当で支援を行った。特に長期休業中の支援については、教科の特性や専門的知識が必要であるケースが多いため、協力可能な教員で日程割り当てを行い、個別に学習支援を行った。

(2) 合理的配慮や福祉的就労に関する本校独自の「特別支援ファイル」の作成

- ① 合理的配慮が必要な生徒が増加し、個別の教育支援計画作成の流れをまとめて、校内統一した流れで合理的配慮の提供が可能となるようまとめた。
- ② 障がい者枠での就職や福祉的就労の生徒が増加し、雇用や契約までの流れや本校が関係する関係機関等についてまとめた。

①・②の内容を一つのファイルにまとめ、教員それぞれが書き込めるようにし、オリジナルのファイルができるように配布した。福祉的就労の面では専門的な情報も盛り込み、進路指導を進めていくうえで、教職員の不安が軽減できる内容とした。

(3) 校内研修の実施

昨年度より2年計画で校内研修を実施。年に2回研修を実施した。

<令和4年度>

- 8月 「発達障がい等を抱える生徒の福祉的就労までの流れ及び学校と関係機関のかかわり」
講師 障がい者就業・生活支援センター 職員
- 2月 「生徒の特性に合った効果的な指導・対応方法について」
講師 いわき教育事務所 指導主事

<令和5年度>

- 8月 3グループに分かれての研究協議
 - ① 「発達障がい等を抱える生徒の福祉的就労の進路指導の流れについて」
 - ② 「発達障がい等を抱える生徒の問題行動に対する生徒指導の在り方について」
 - ③ 「発達障がい等を抱える生徒の学習指導について」
- 2月 8月の校内研修にて共有した情報をもとに、実践してみたことことの成果と課題の共有及びリフレミング体験

1年目はインプットの年として、福祉的就労に関する知識、生徒の特性に応じた指導についての知識を深めるため、講師を招いて講話を実施した。

2年目はアウトプットの年として、それぞれが希望するグループにて日々の実践内容について協議を行った。

2 実践の成果

- (1) 長期休業中では、昨年度より多くの生徒が参加し、意欲的に取り組む姿がみられた。生徒それぞれのペースで学ぶことができるため、じっくり学習を進めることができた。また、多くの教職員が支援に携わることで、学校全体で学習会を行うことができた。

考査期間中では、苦手科目にも挑戦する生徒が多くなり、考査の成績が上がった生徒もいた。勉強の仕方が分からない、勉強自体が苦手といった生徒が多いが、生徒自身が勉強に取り組もう、テスト前に学習会には来よう、と少しずつ意識の変容が見られた。



- (2) 合理的配慮の提供までの流れや福祉的就労の事務手続きや契約までの流れが視覚化されることにより、教職員が見通しを持って、対応することができたと感じる。また、専門的な知識については、校内研修で深めた知識と併せて、活用できたのではないかと感じる。

また、前年度の事例を内容に盛り込んだことで、実際の事例を見ながら今後の流れを予想することができ、実績を記録として残していくことも大切であると感じた教職員が多かった。



- (3) 2年計画で実施した校内研修だが、研修内容を決定する際に教職員へ実施したい研修内容のアンケートを実施したことにより、ニーズを把握することができ、校内研修を充実させることができた。

1年目は、福祉的就労の流れや事例を「障がい者就業・生活支援センター」の職員から講話を聴くことで、より実践に活かすことができた。障がい者雇用や福祉的就労といった、今まで対応例が少なかったケースについて、専門的な立場から話を聴くことができたのは、今後の進路指導の充実にもつながった。生徒指導については、特別支援の視点を取り入れた生徒指導について新たに知識を深めることができ、さらに特別支援学校の教員より実際の生徒指導の内容を聴くことで実際の生徒指導に活かすことができた。

2年目は、それぞれ希望したグループに分かれて具体的な事例を基に研究協議を行い、それぞれのグループが意見を交わすことができ、今後の実践に活かせる協議となった。その後、実践内容や

課題を共有することで、成果があった実践や課題を次年度に活かせる内容となった。



3 課題及び今後の方向性

- (1) 昨年度より学習会を開始し、今年度2年目を迎えた。本来利用してもらいたい生徒の利用が少ない点では、今後の課題となっている。利用した生徒の満足度は高いため、今後も継続して行っていきたい。また、今年度より学習支援員やコーディネーターだけでなく、他の教職員も支援に加わったことで専門的な指導もできたため、支援する教職員についても、今年度同様としたい。
- (2) 本校独自のファイルを作成し、事例も含めた内容となっており、記録の蓄積を続ける必要がある。自由に書き込めるファイルとなっており、オリジナルのファイルが出来上がるが、まだファイルをどのように使用していくとよいか教職員の中でも理解に差があり、効果的に活用できていない場面がみられる。今後使用方法についても、どうしたら使用しやすか等、教職員へ聞き取りを行いながら、効果的な活用ができるようにしていきたい。
- (3) 今年度までは、発達障がいを抱えた生徒に対しての対応について2年計画で校内研修実施したが、本校の課題は発達障がいだけでなく様々な課題があるため、今後は別のテーマで実施を考えている。そのためにも、校内のニーズを改めて正確に把握したうえで、内容を決定し、必要に応じて講師の選定を行いたい。様々な課題を抱える生徒の対応ができるよう校内研修を実施し、生徒対応につなげていきたい。